平井冬秀紀行文『吾妻道の記』（影印・翻刻）

中川　豊

解題

旅の目的と内容

平井冬秀（一七二七―一七八三）が、生地美濃加治田から東海道を江戸へ下り、さらに日光東照宮・中禅寺湖周辺へ赴いたさいの紀行文。江戸下向の目的は、本文巻頭に「もとよりまかせぬ公の事」とあるのみで、詳細は記されていない。延享三年（一七四六）に領主大嶋氏の江戸屋敷が類焼し、その「普請資金調達の相談」のため、と中島勝国氏は記している（翻刻参照）。また、本文中「八とせまへ行来せし折」（5オ）と、冬秀は、八年前の東下を回顧しているが、同氏は、これは延享三年二月の大嶋氏屋敷の火事見舞いのためであったという。

宝暦三年（一七五三）二月十五日に出発し、病気や安倍川の増水などに悩まされつつ、十日後の二十五日に江戸へ到着。その日のうちに主家へ挨拶を済ませる（15オ）。江戸では公務の空いたときに浅草・上野・湯島などを物見遊山したり、「あてなる御館」で句会にもしばしば出座していたようで（42ウ）、公私ともに充実した日々が推測される。そして、十日ほどの仕事の合間を縫って三月二十日に友二人を伴い日光へ出立している（20オ）。輪王寺や東照宮などの寺社を廻り、同月二十七日に江戸へ帰着。加治田への復路は、往路と同じく東海道で、四月十八日に江戸を出立し、途中、小夜の中山で道寿斎なる隠士と再会をはたし（50ウ）、同二十七日に加治田へ帰参している。

多くの紀行文がそうであるように『伊勢物語』を意識しつつ、十分に計算された構成の上に、流麗な文章が滞りなく続く。日光における記述は、特に詳細で、観察が行き届いている。江戸の中期、美濃出身の一商家がものした紀行文として注目するとともに、当時二十七歳の冬秀の文人意識を感じさせるものがある。

作者

享保十二年（一七二七）～天明三年（一七八三）。五十七歳。通称、甚兵衛。字、見爾。号、竹珂園・欣松斎。和歌を松浦寛舟・有栖川宮職仁親王らに学ぶ一方、美濃派俳人として活躍しており、宝暦五年（一七五五）頃より地元加治田の歳旦帖を編纂している。嗣子公寿により冬秀追悼句集『別れ霜』が編纂された。

底本書誌

松井屋酒造資料館蔵（松10）。半紙本袋綴写本一冊。冬秀自筆。黄土色表紙。外題「吾妻道濃記」。内題なし。料紙は楮紙。墨付き五十四丁。奥書「美濃加治田／欣松斎／平井冬秀述」。宝暦三年平井冬秀自筆。伝本は、他に知られていない。

翻刻

中島勝国氏『『加治田村郷村帳』『吾妻道の記』他』（富加町文化財調査報告書第二十四号　富加町教育委員会、平成十七年六月）。

〔附記〕ご所蔵資料の紹介をご許可くださった松井屋酒造資料館の酒向嘉彦氏に御礼申し上げます。また、閲覧にさいしてお世話になりました富加郷土資料館の島田崇正氏にも厚く御礼申し上げます。

凡　例

一　影印の丁付けは、遊び紙を含めず、墨付より一丁として数えた。巻末に白紙が二十八枚含まれているが、これは収録していない。

一　影印、翻刻ともに和歌に通し番号を付した

一　漢字は、おおむね通行の字体とした。

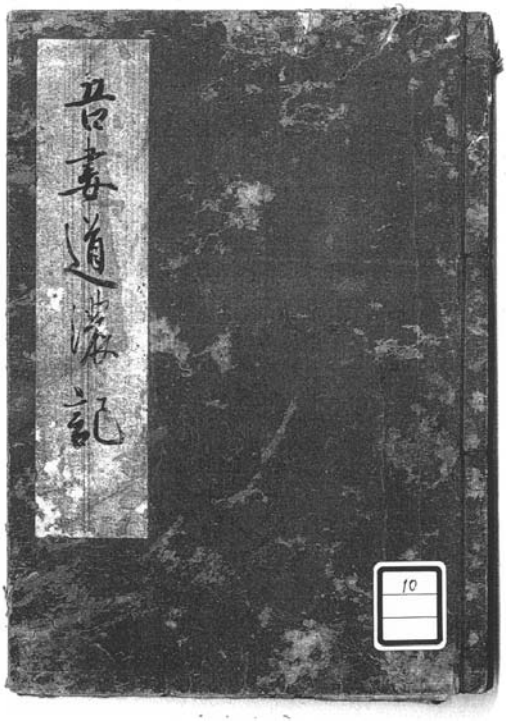
一　翻刻には濁点、句読点を付した。

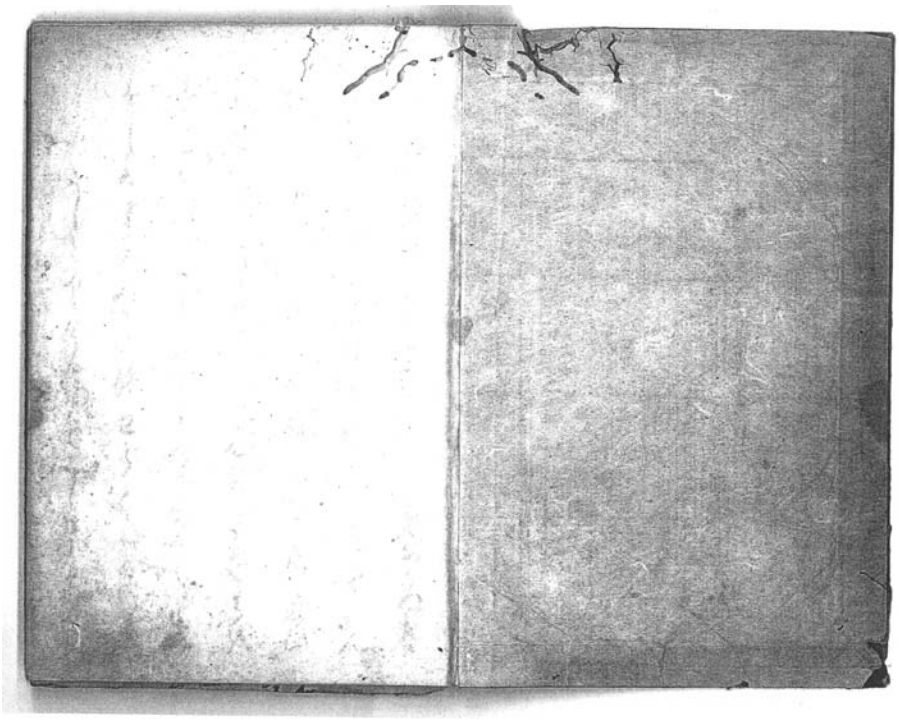
一　丁移りは、」（1ウ）のように示した。

一　虫損などにより判読が困難な箇所は□□（虫損）とした。

一　底本の不審な箇所には傍らに（ママ）を付した。

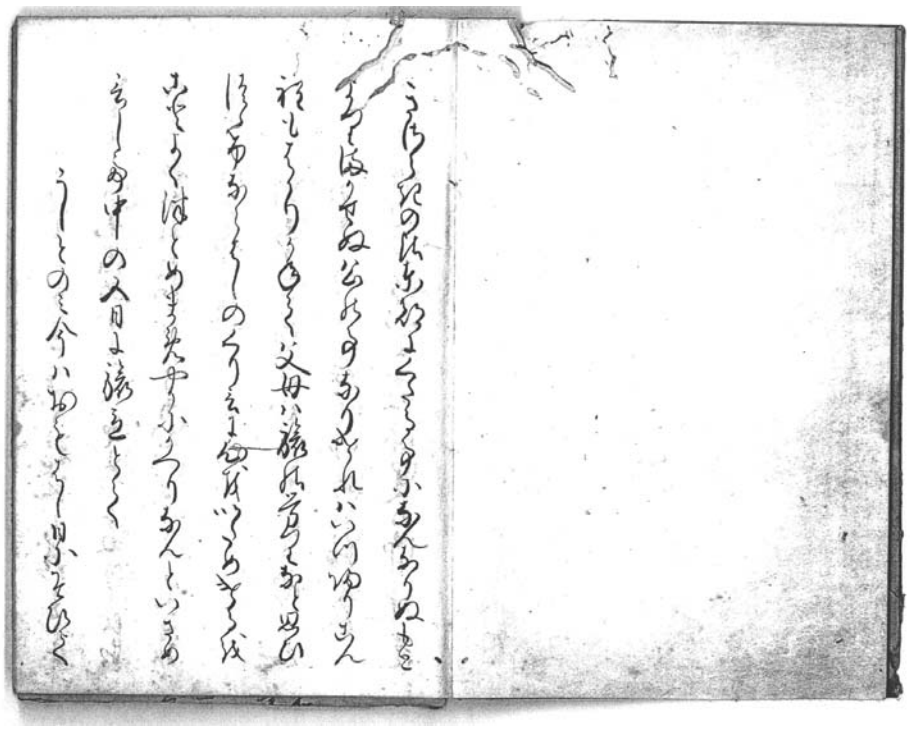
【影印】





（遊び紙）

1



（１オ）　（遊び紙）

4　3　2

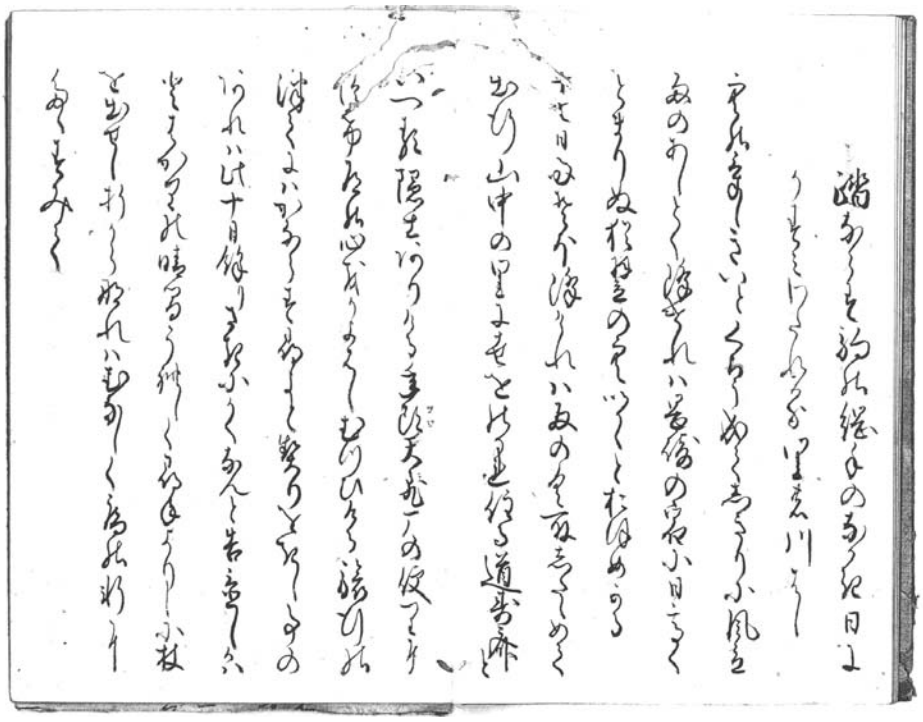
（２オ）　（１ウ）

六六

6　5

（３オ）　（２ウ）

7



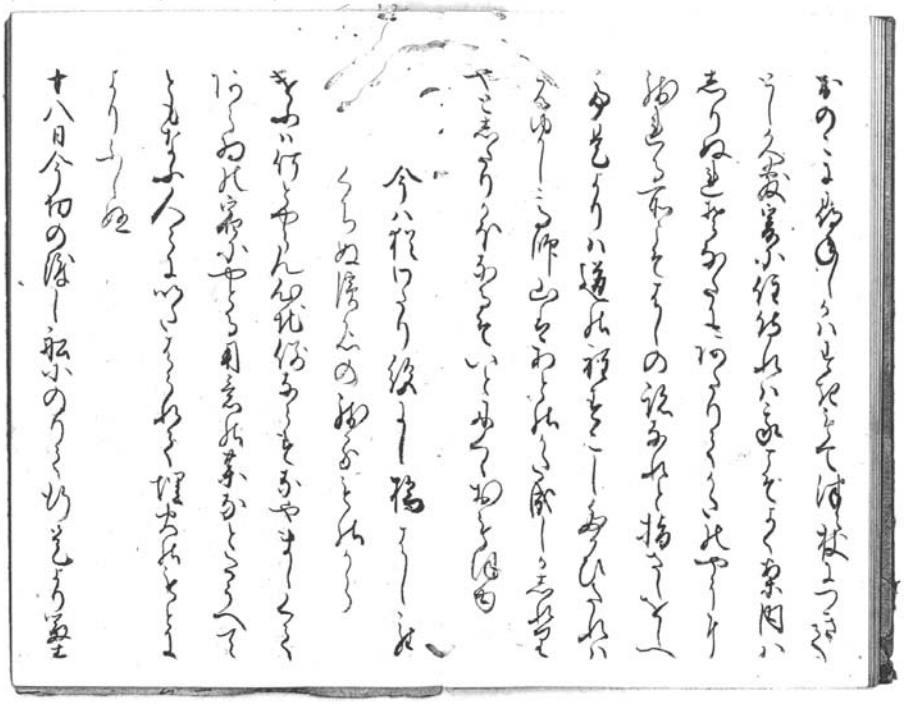
（４オ）　（３ウ）

六七

8　9　10

（4ウ）　（5オ）

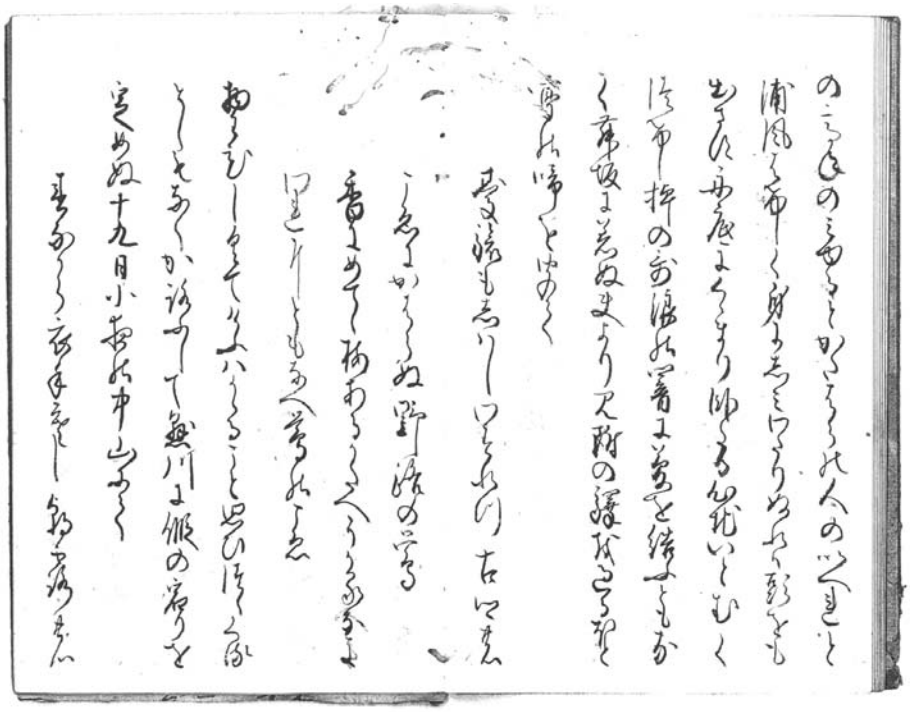
11



（5ウ）　（6オ）

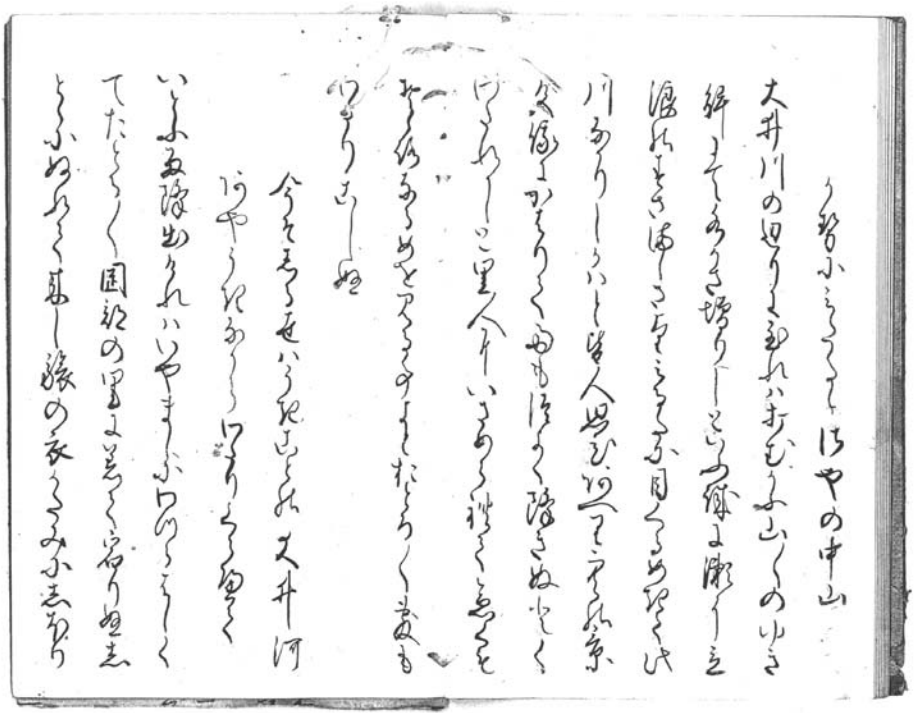
六八

14　13　12



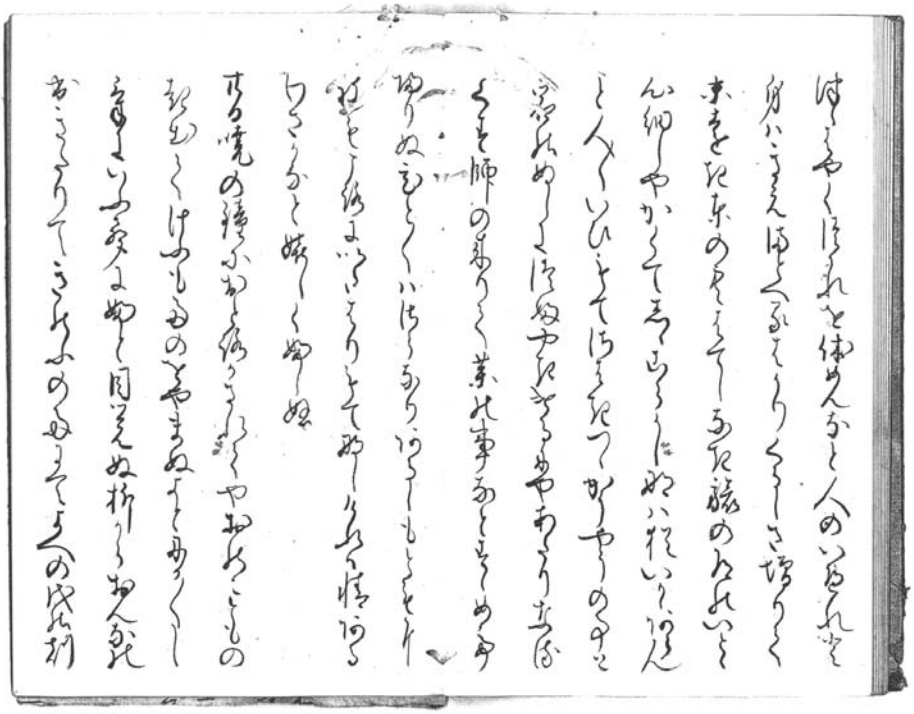
（７オ）　（６ウ）

15

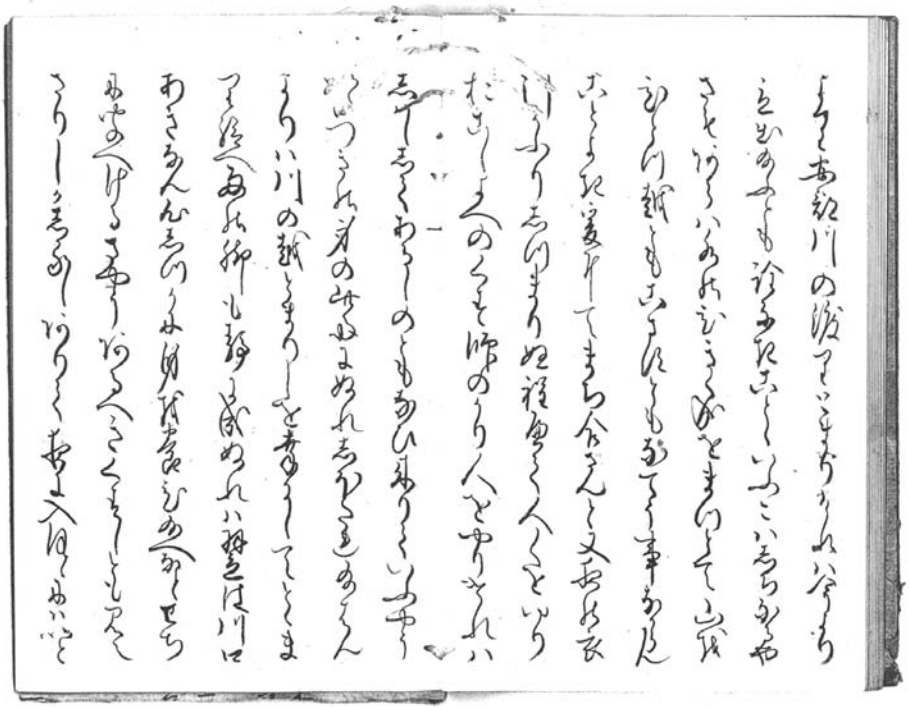


（８オ）　（７ウ）

六九



（9オ）　（8ウ）



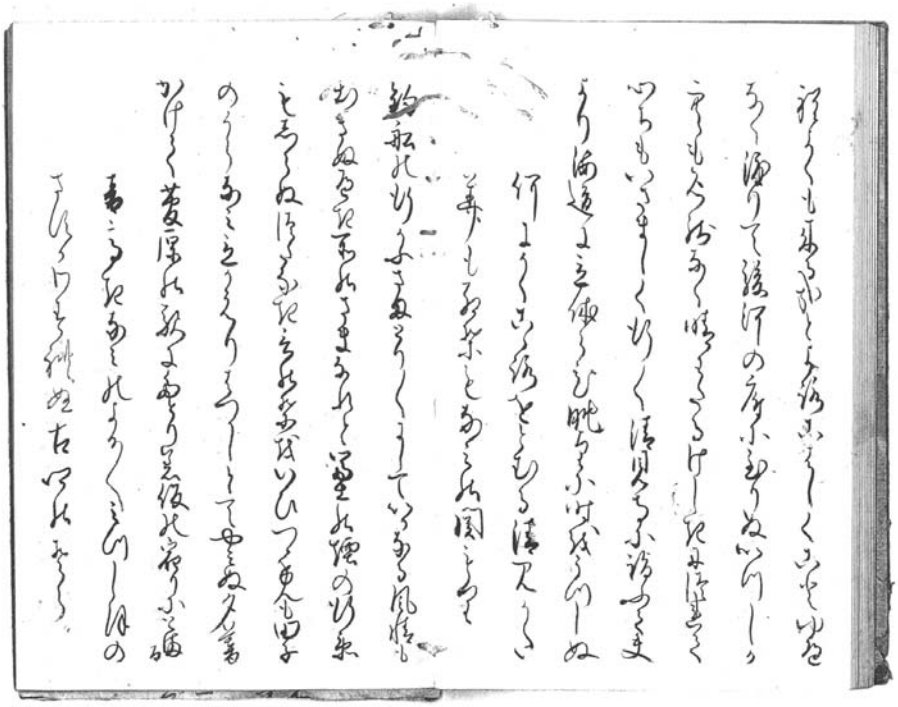
（10オ）　（9ウ）

七〇

17　16

（11オ）　（10ウ）

19　18

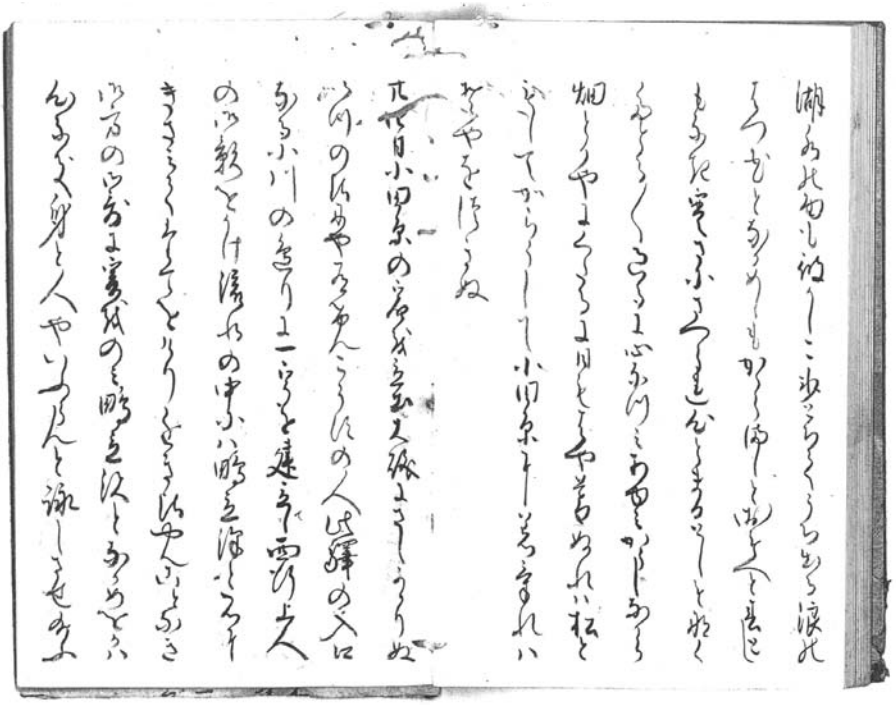


（12オ）　（11ウ）

七一

22　21　20

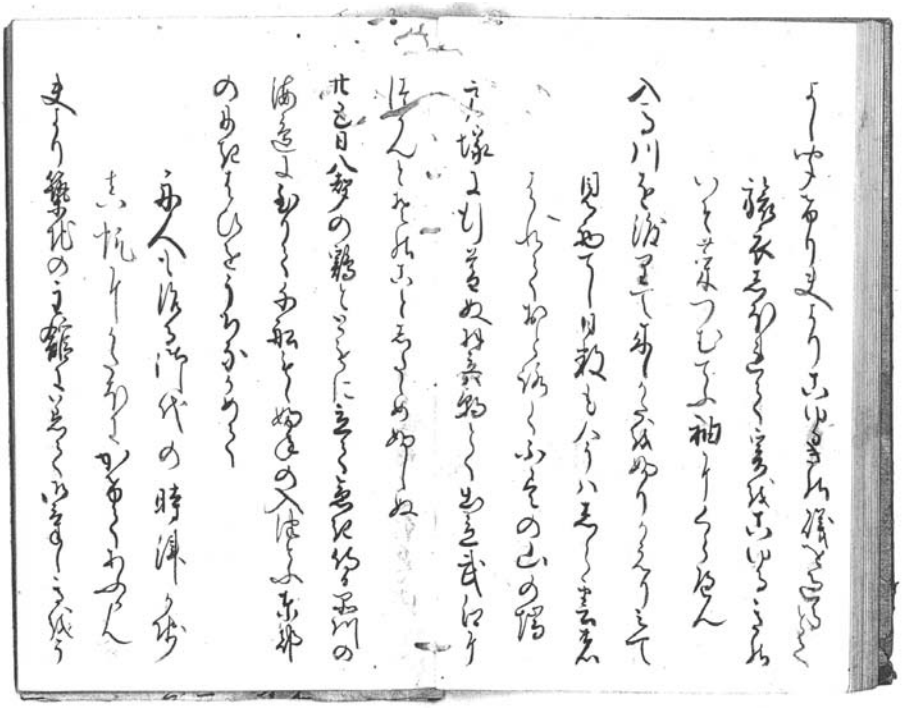
（13オ）　（12ウ）



（14オ）　（13ウ）

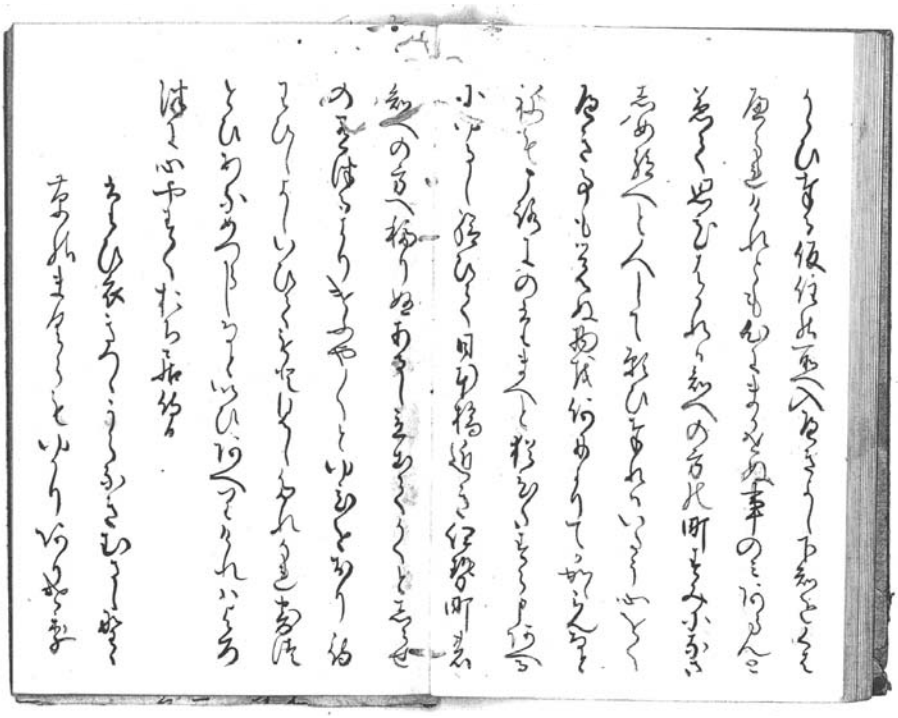
七二

25　24　23



（15オ）　（14ウ）

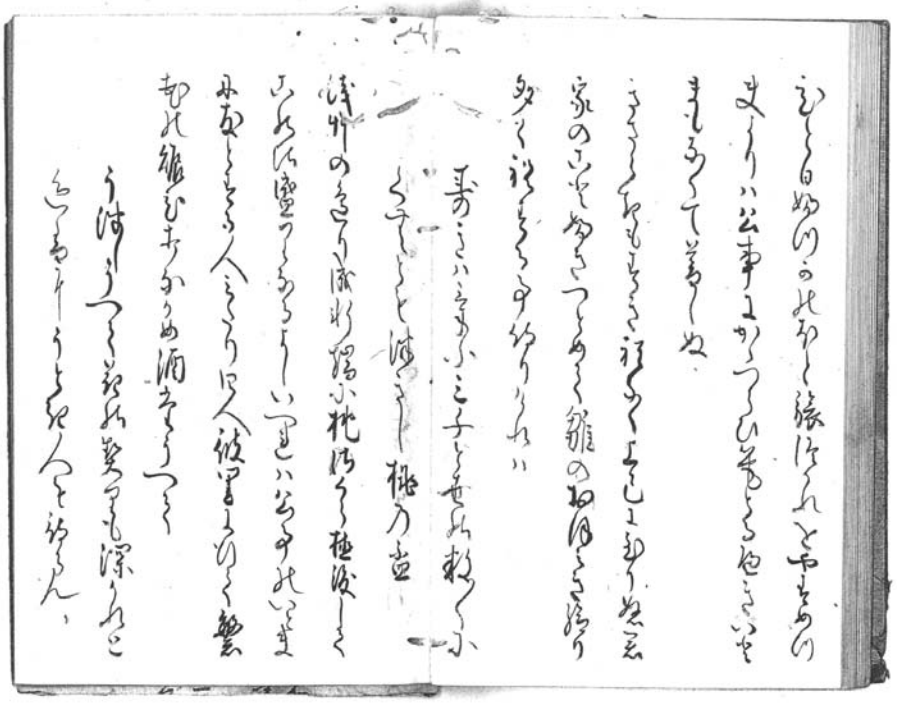
26



（16オ）　（15ウ）

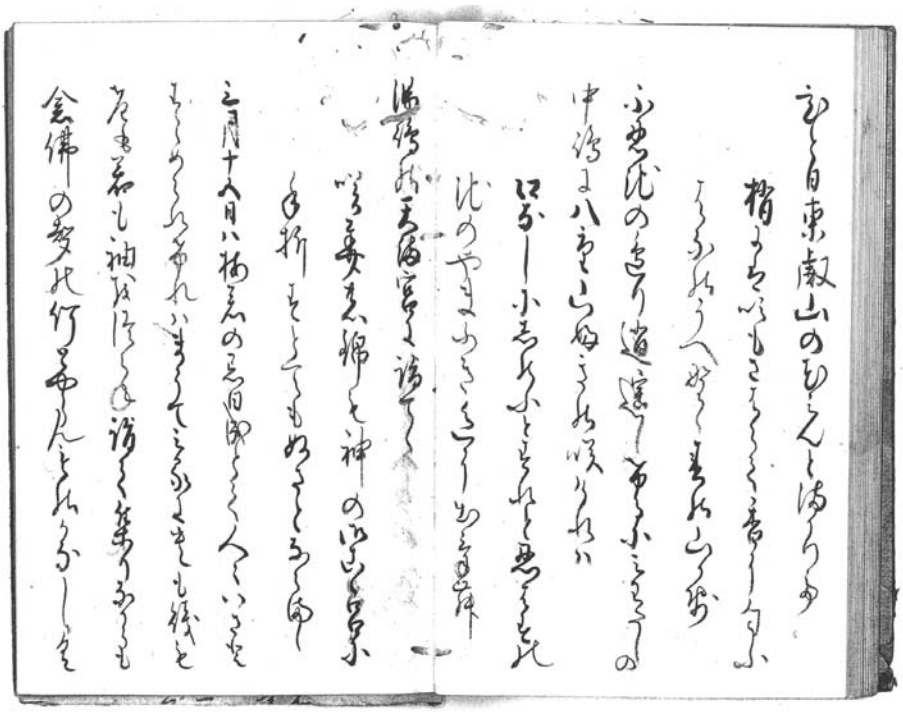
七三

28　27



（17オ）　（16ウ）

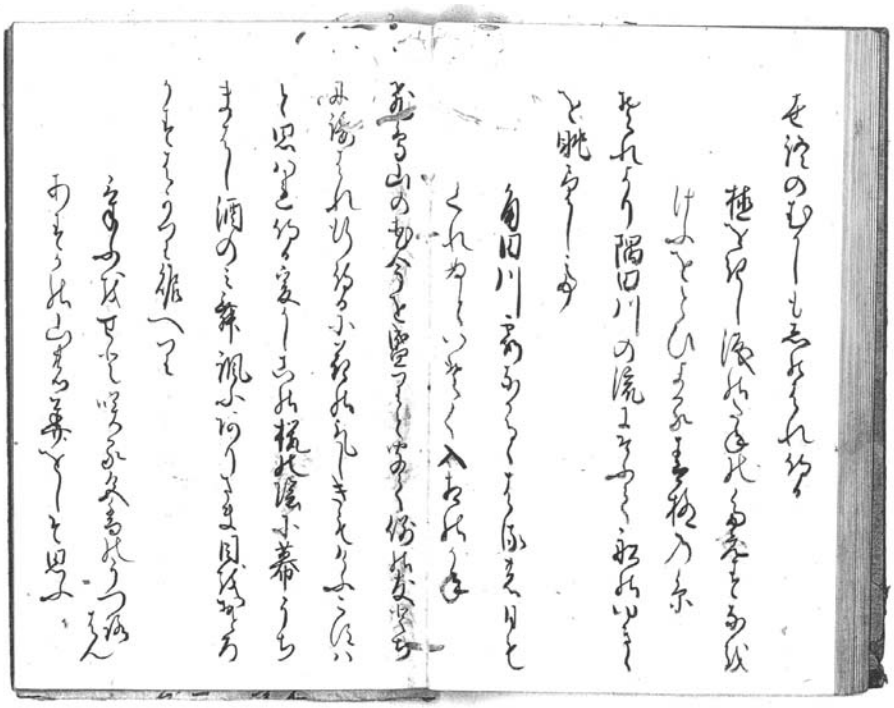
31　30　29



（18オ）　（17ウ）

七四

34　33　32



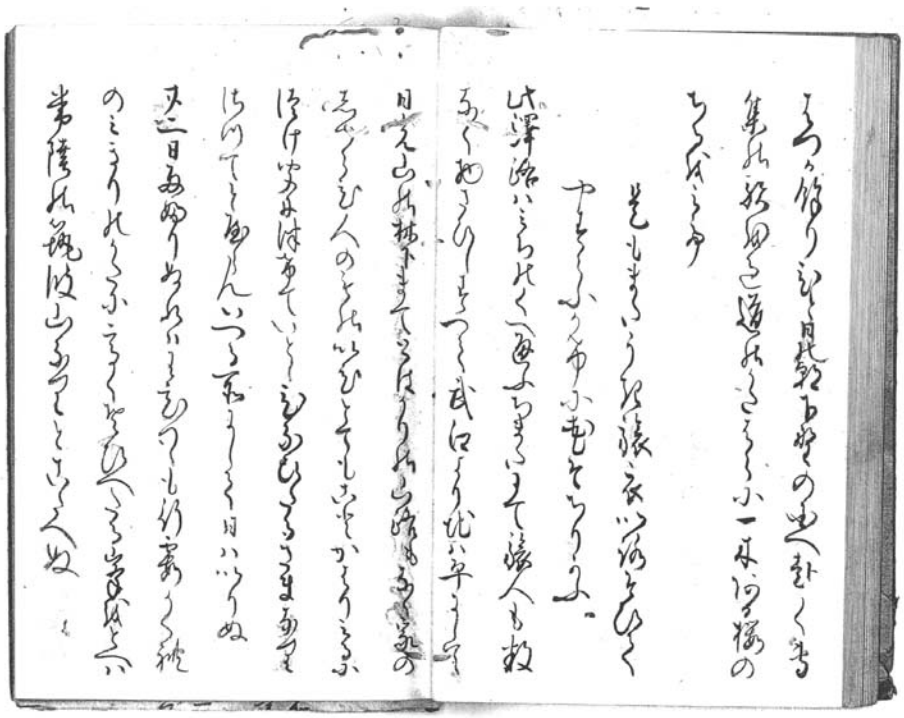
（19オ）　（18ウ）

36　35

（20オ）　（19ウ）

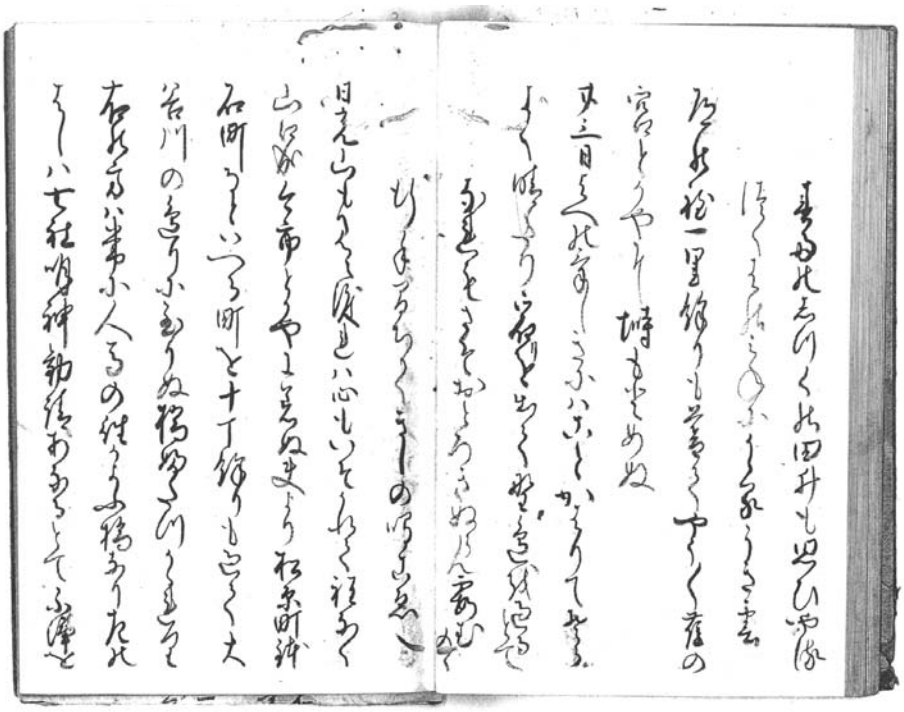
七五

37

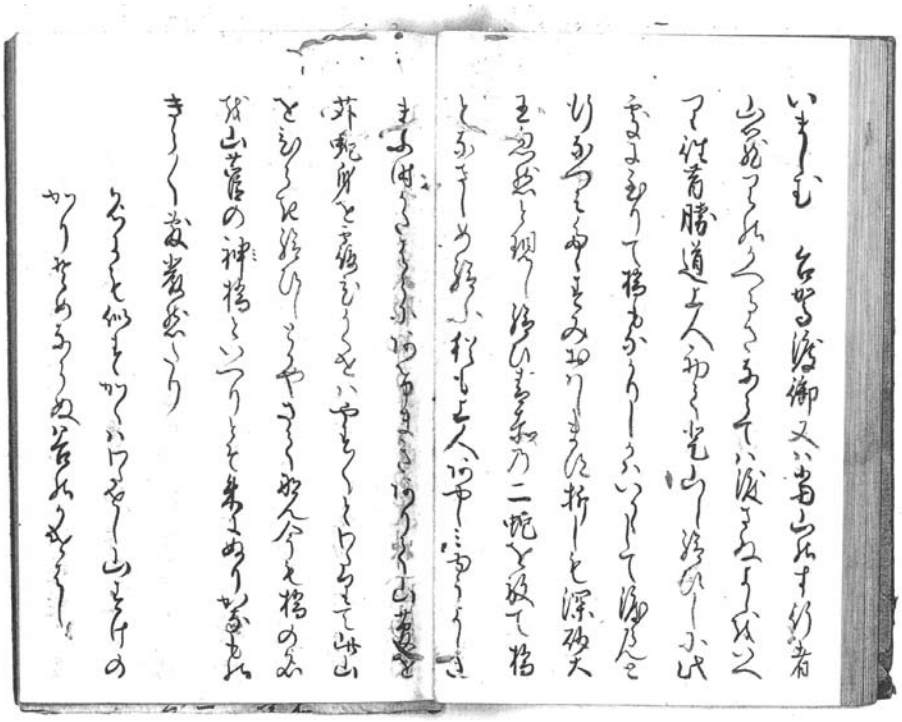


（21オ）　（20ウ）

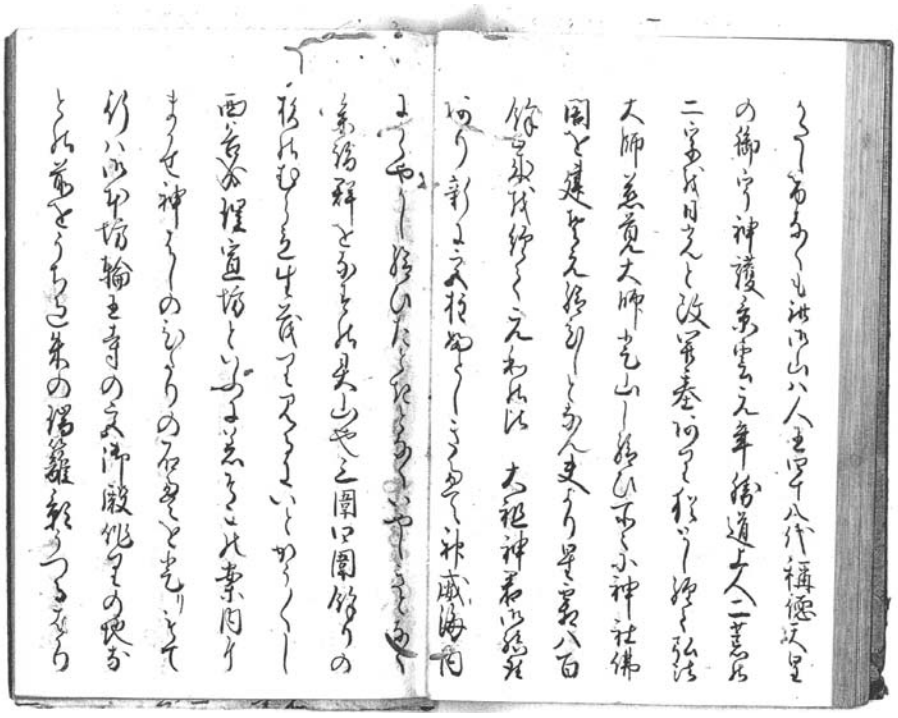
39　38



（22オ）　（21ウ）

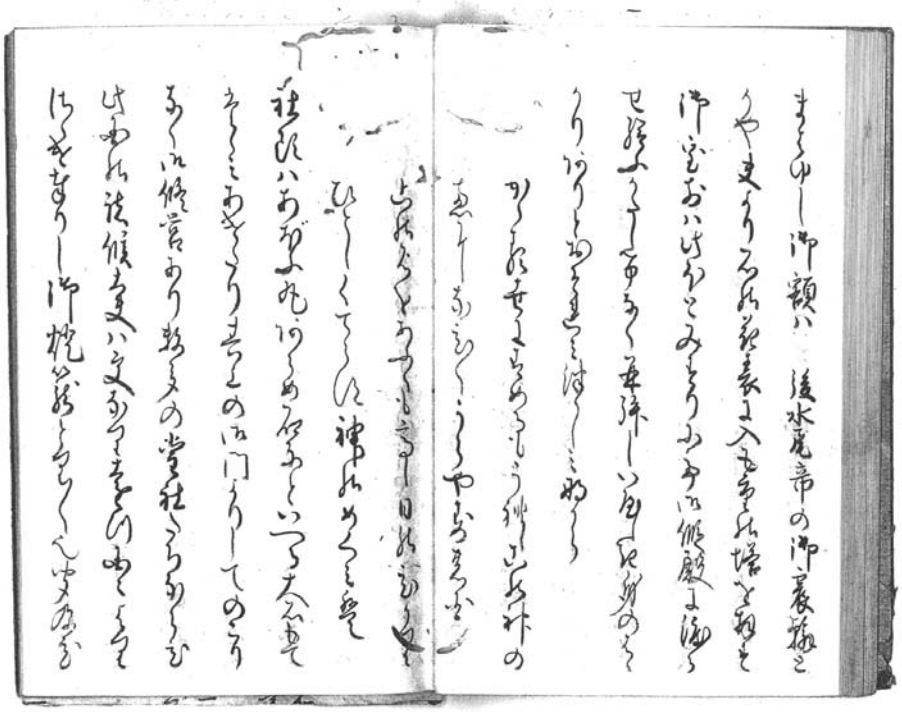


（23オ）　（22ウ）



（24オ）　（23ウ）

42　41

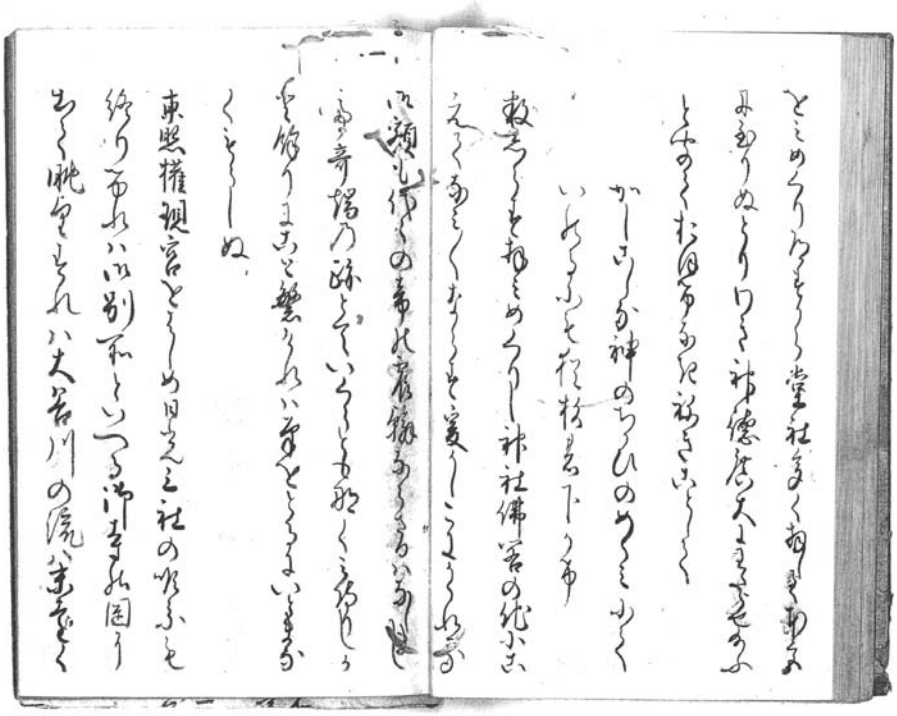


（25オ）　（24ウ）

（26オ）　（25ウ）

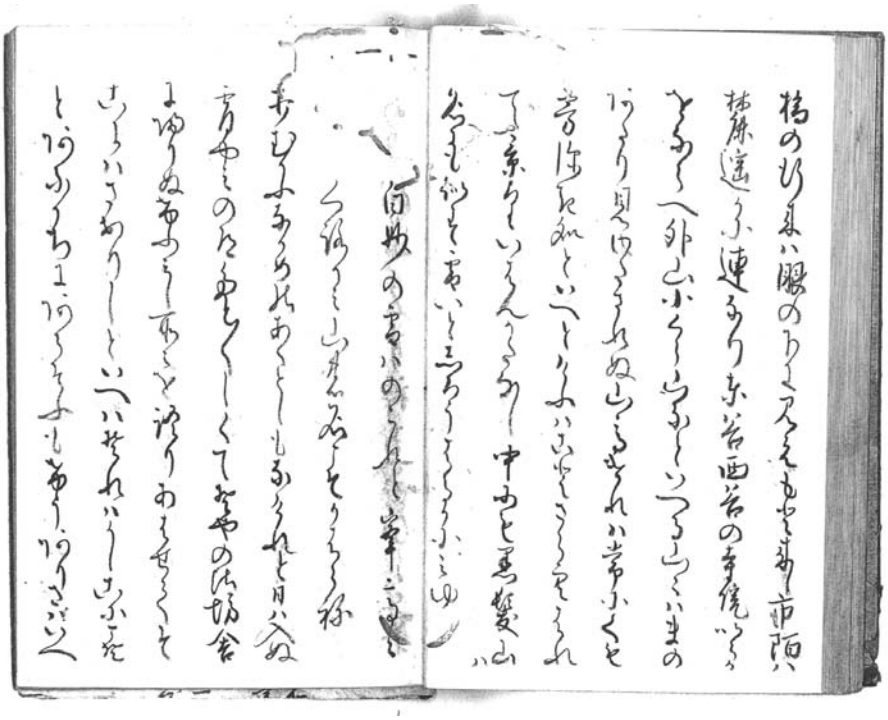
七八

43

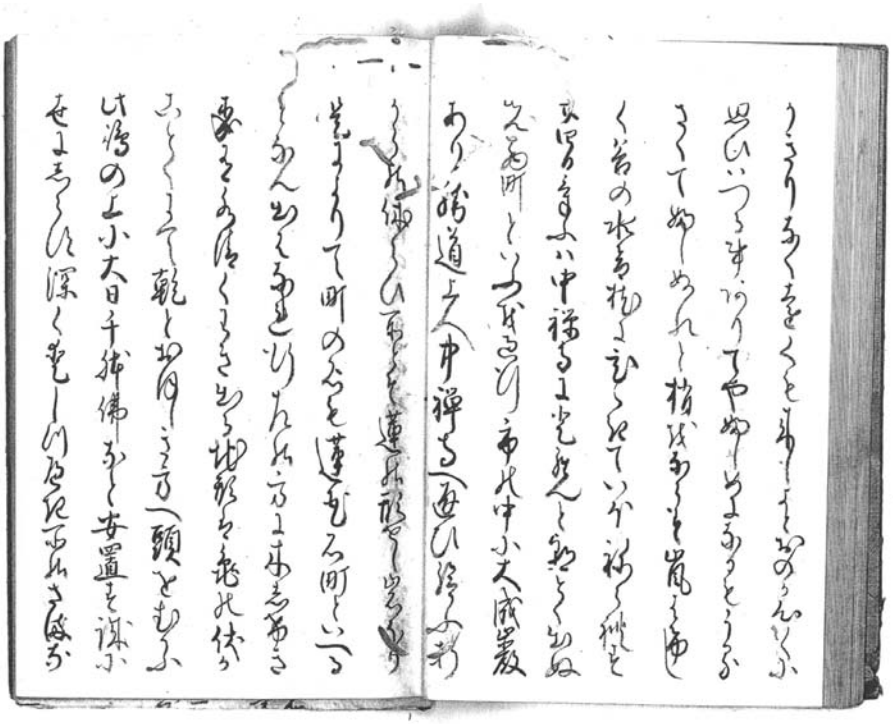


（26ウ）　（27オ）

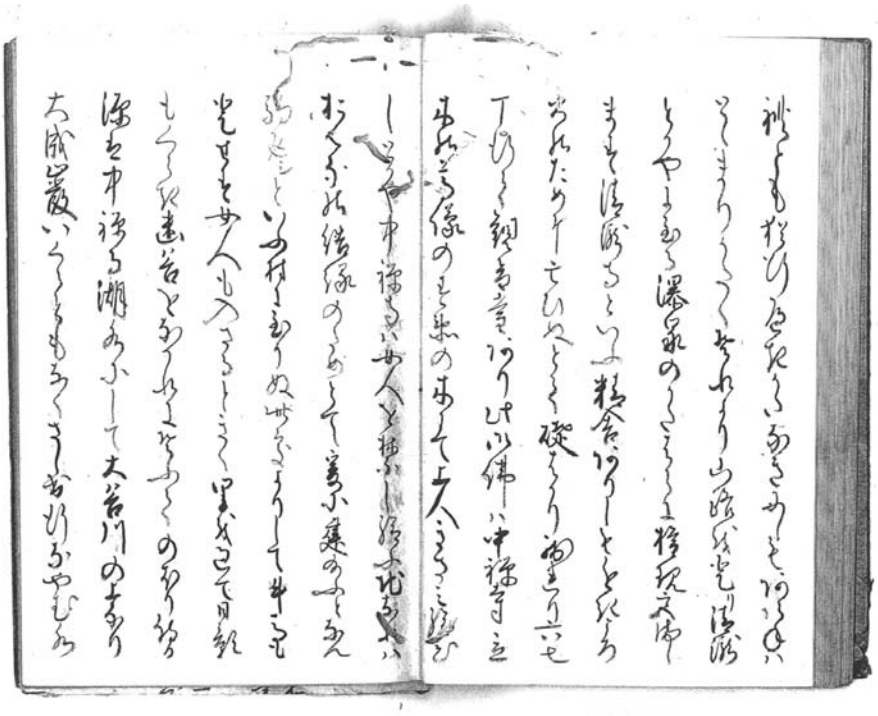
44



（27ウ）　（28オ）

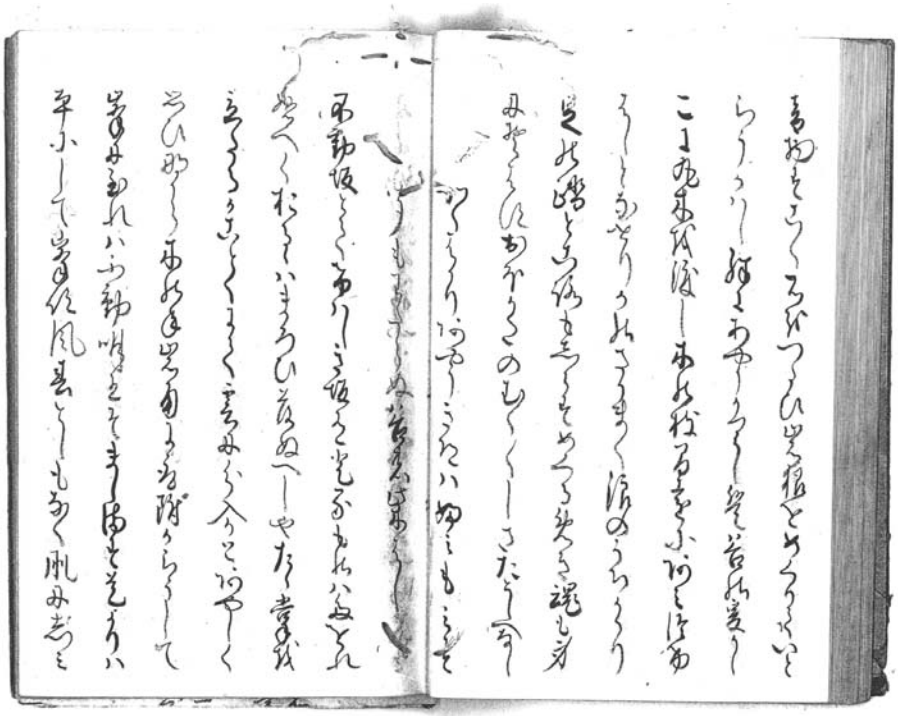


（28ウ）　（29オ）



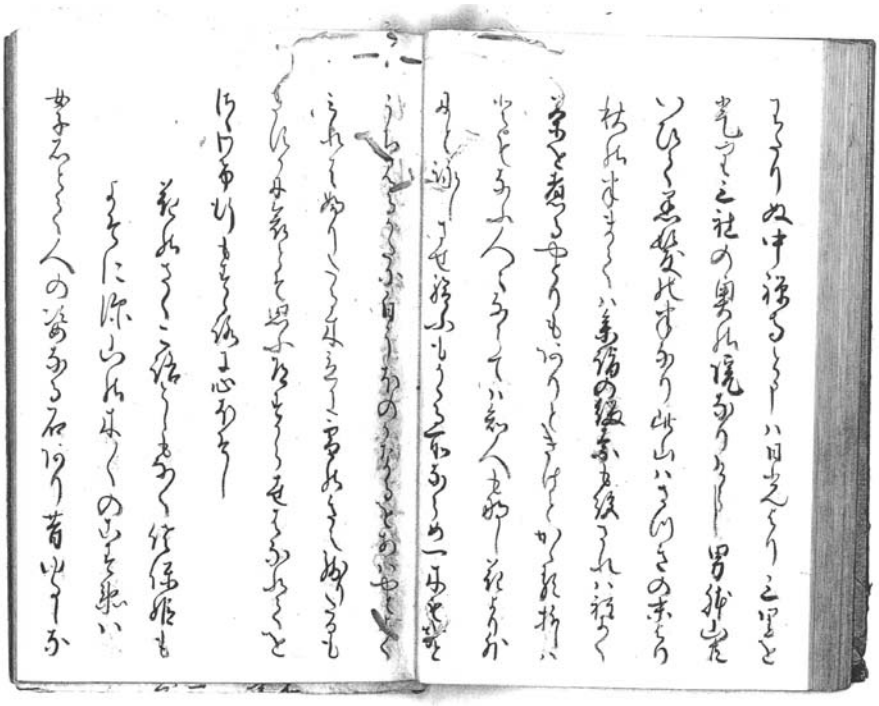
（29ウ）　（30オ）

45



（31オ）　（30ウ）

46



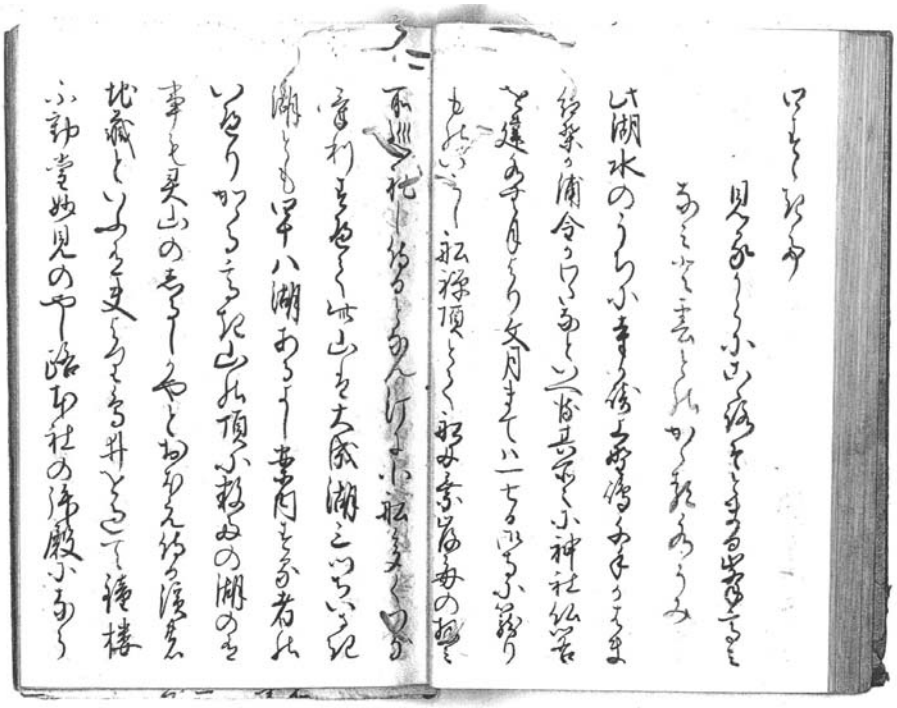
（32オ）　（31ウ）

八一

47

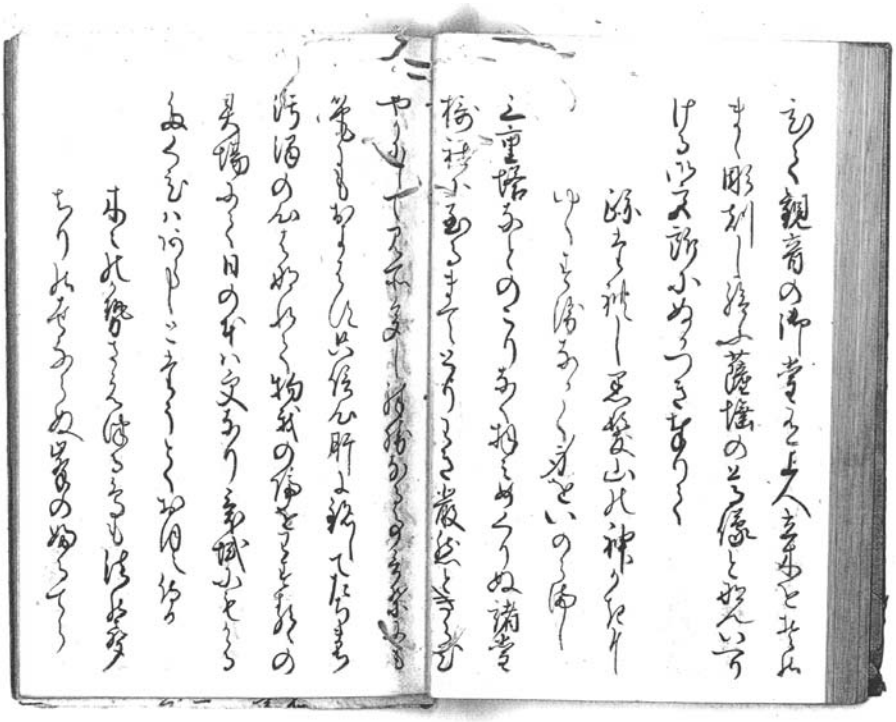
（33オ）　（32ウ）

48

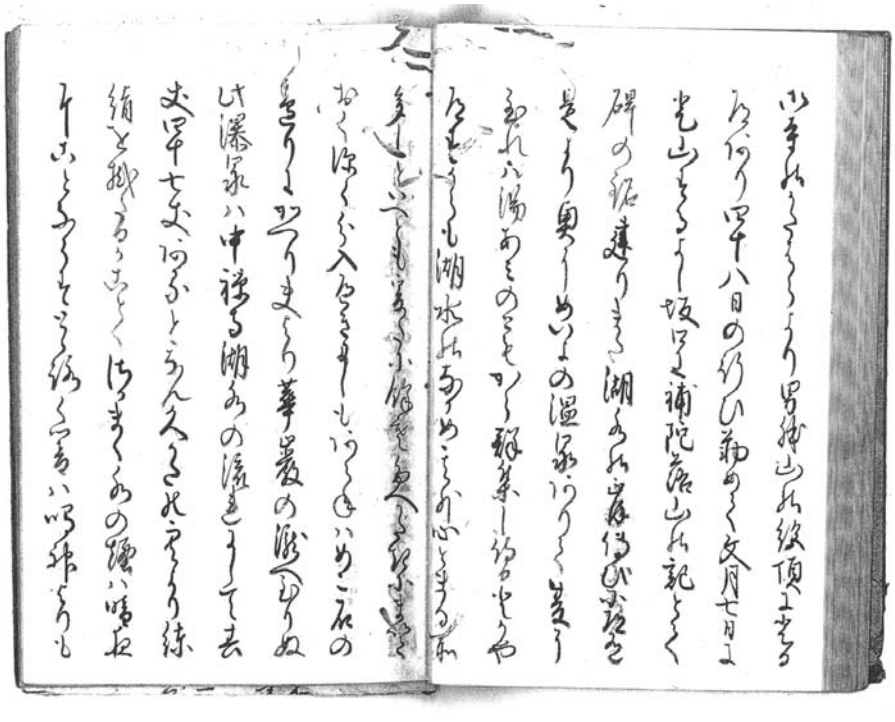


（34オ）　（33ウ）

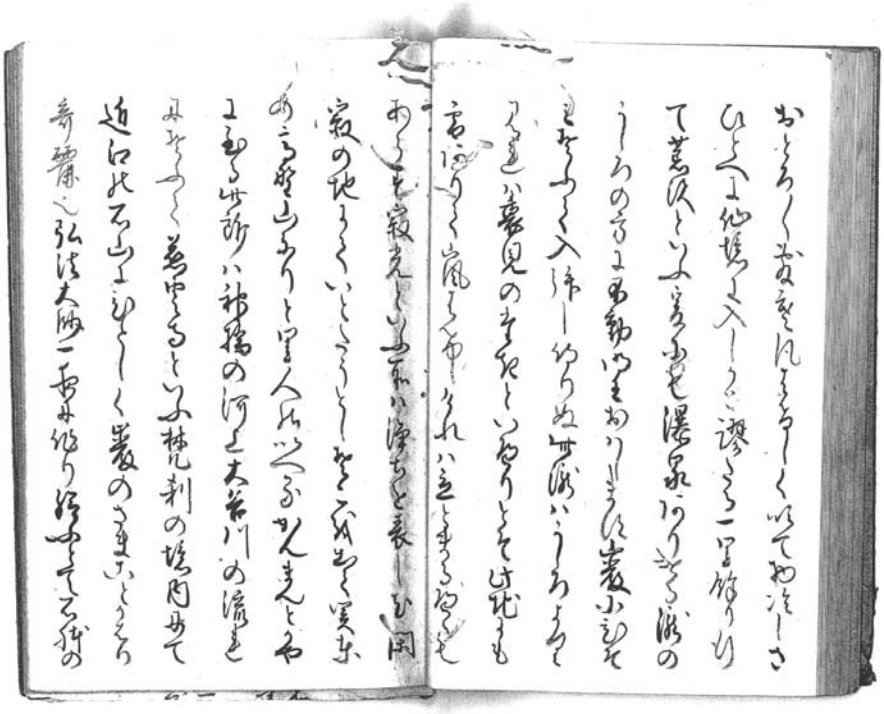
50　49



（35オ）　（34ウ）

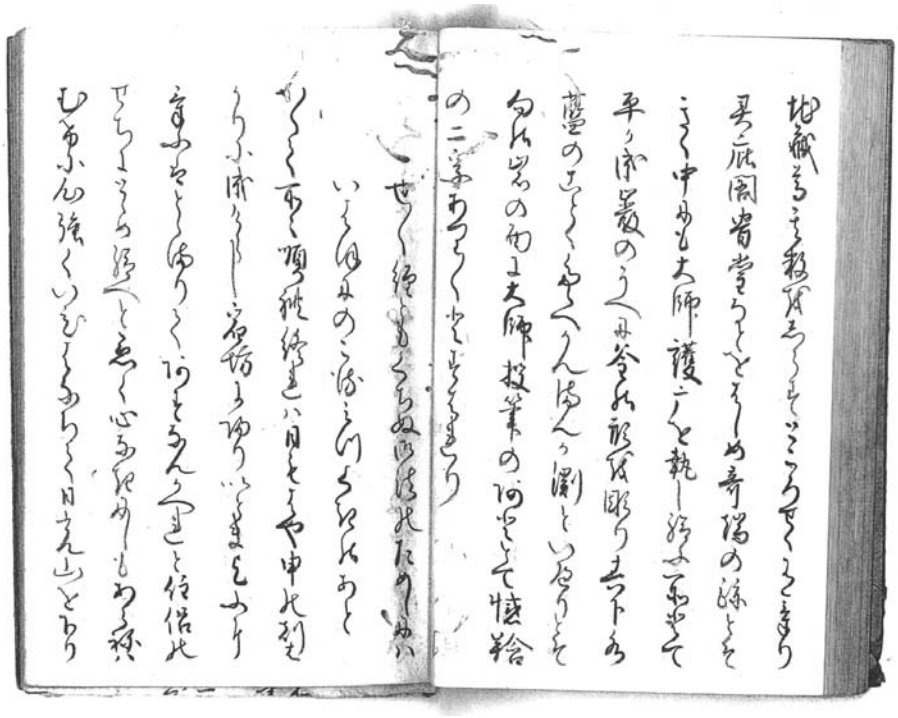


（36オ）　（35ウ）

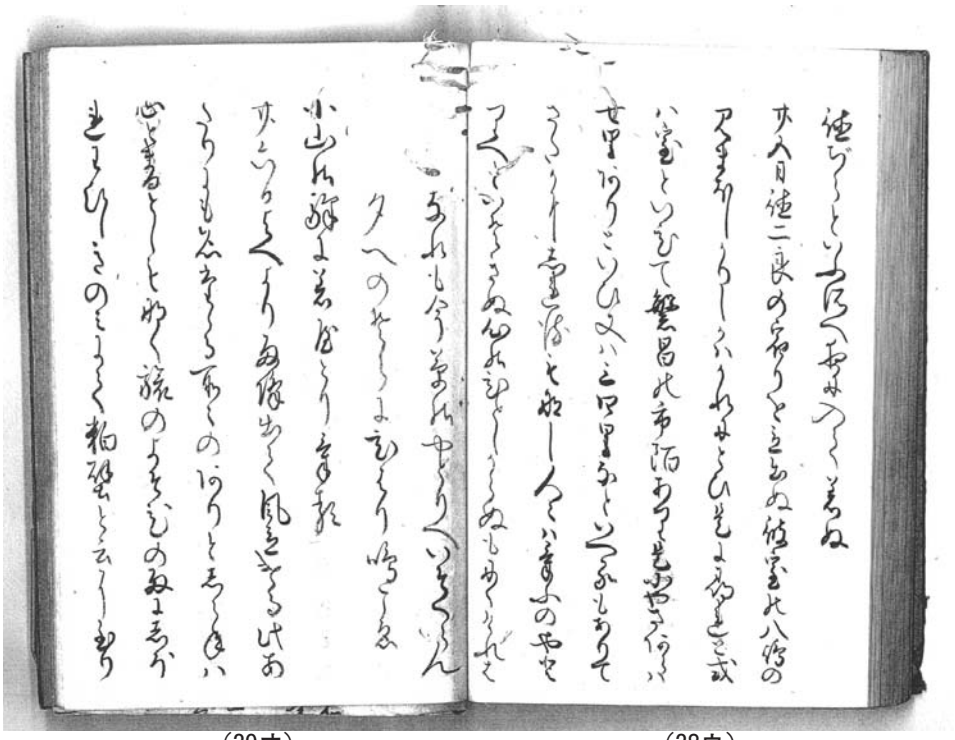


（37オ）　（36ウ）

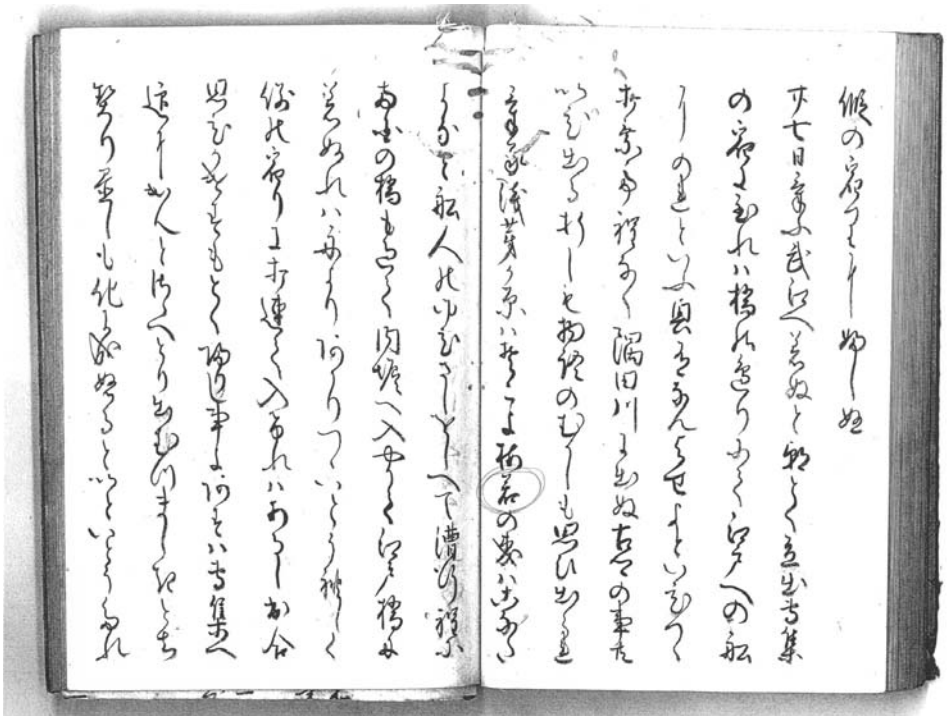
51



（38オ）　（37ウ）

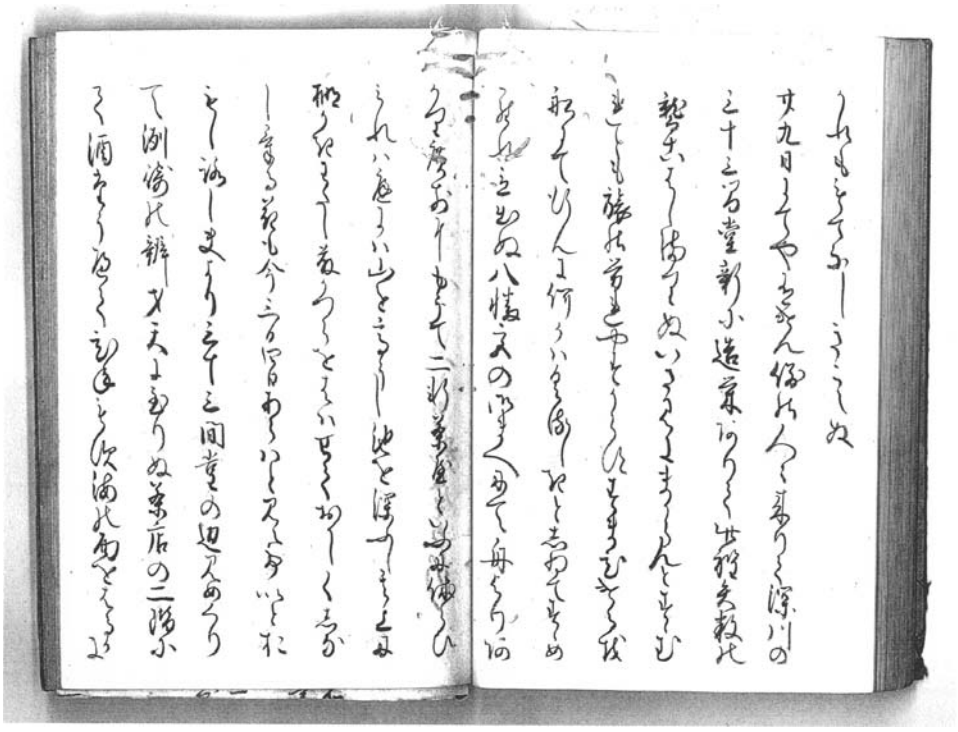


（39オ）　（38ウ）



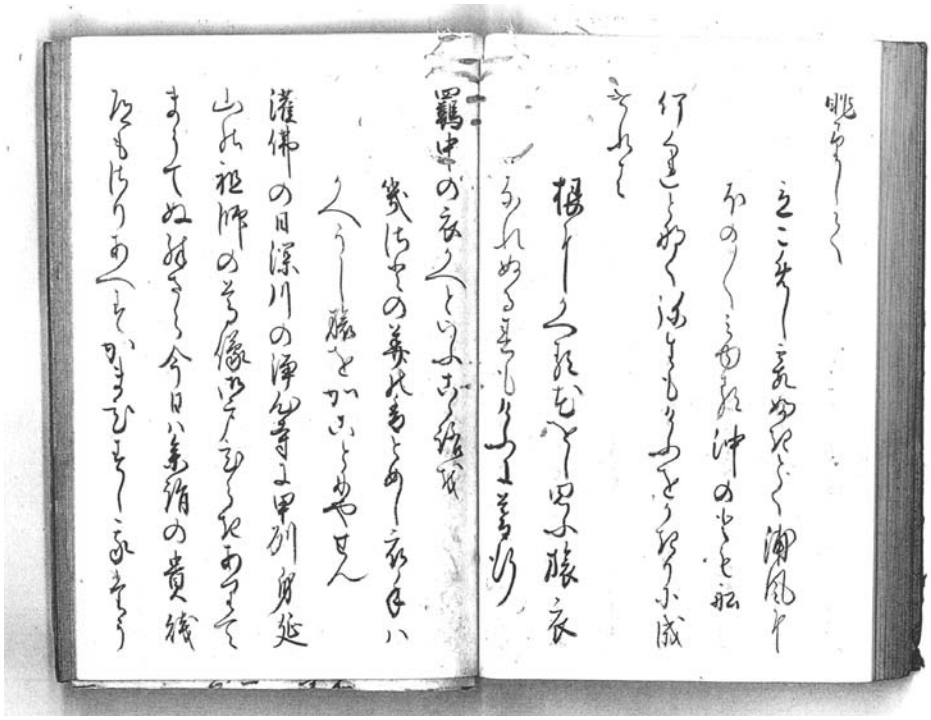
（40オ）　（39ウ）

八五



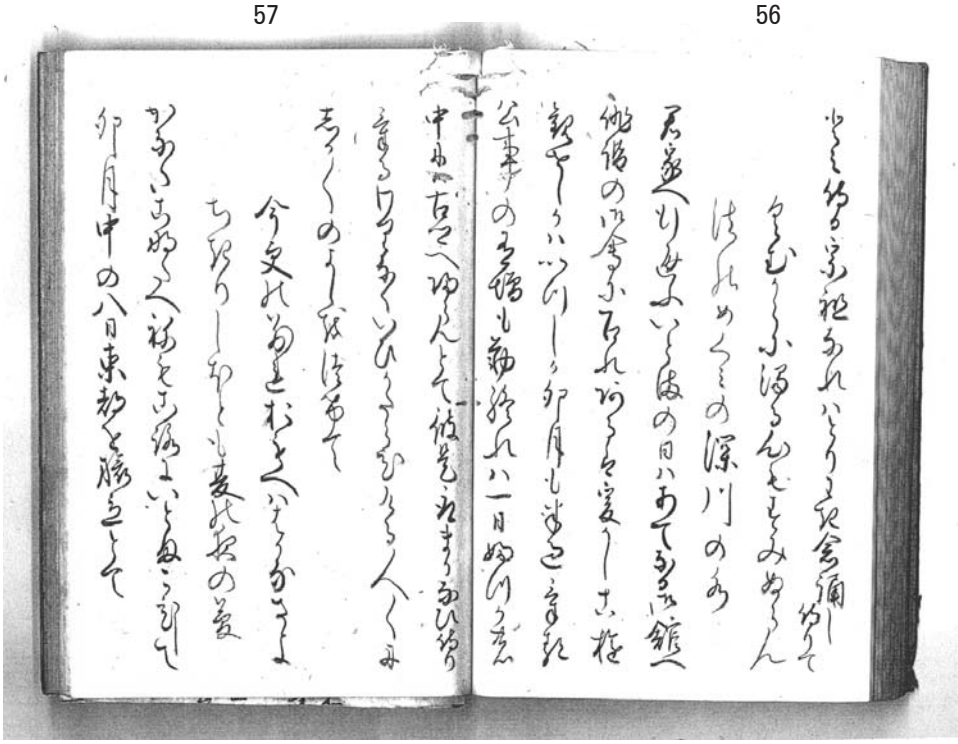
（41オ）　（40ウ）

55　54　53



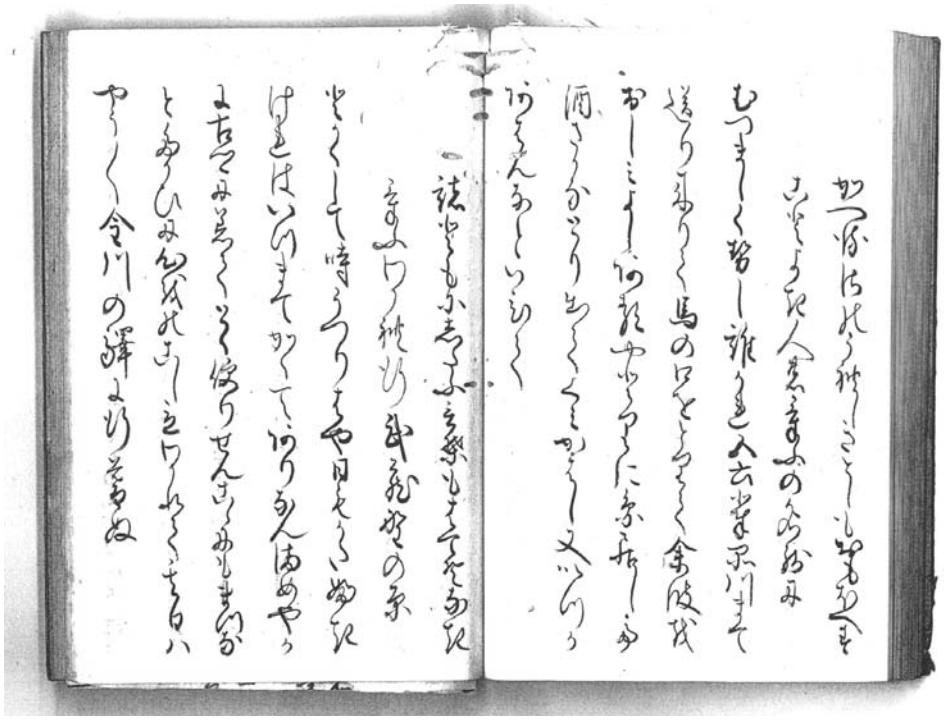
（42オ）　（41ウ）

56　57



（42ウ）　（43オ）

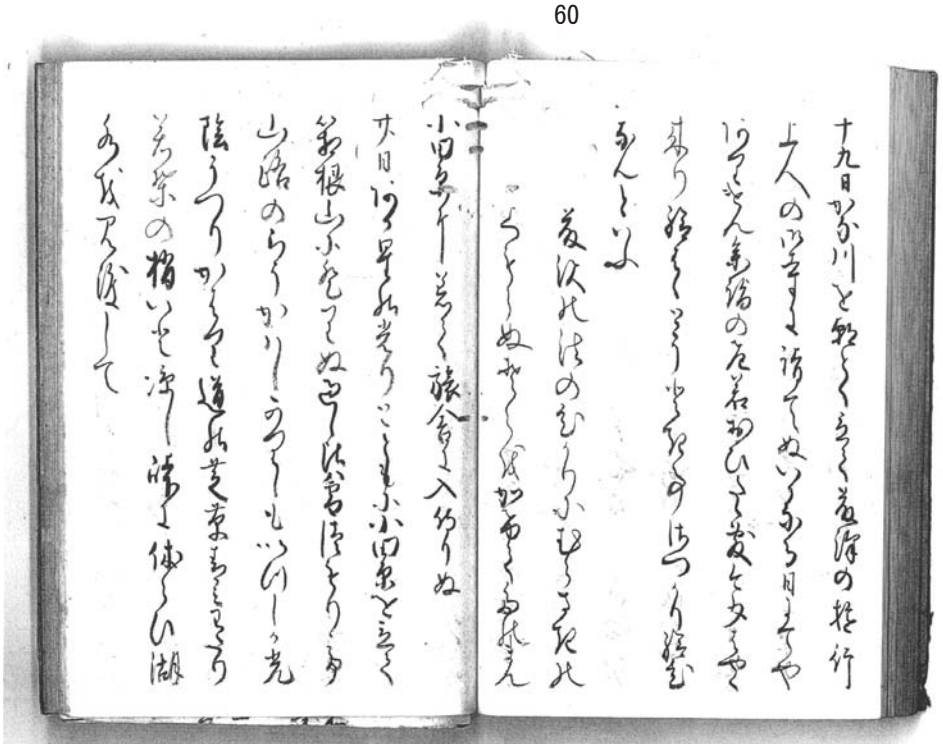
58　59



（43ウ）　（44オ）

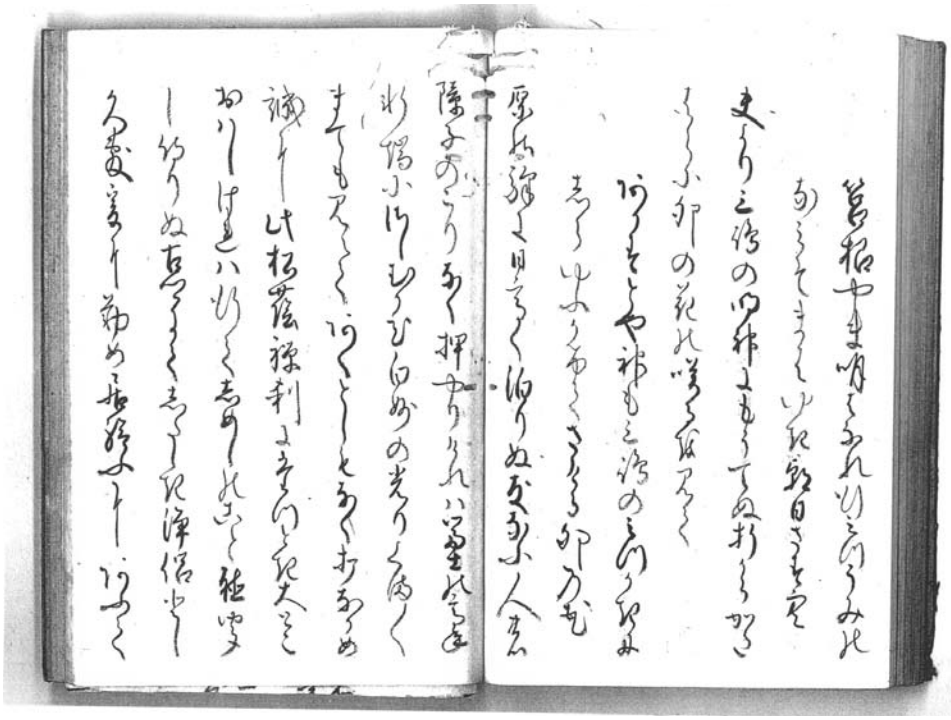
八七

60



（45オ）　（44ウ）

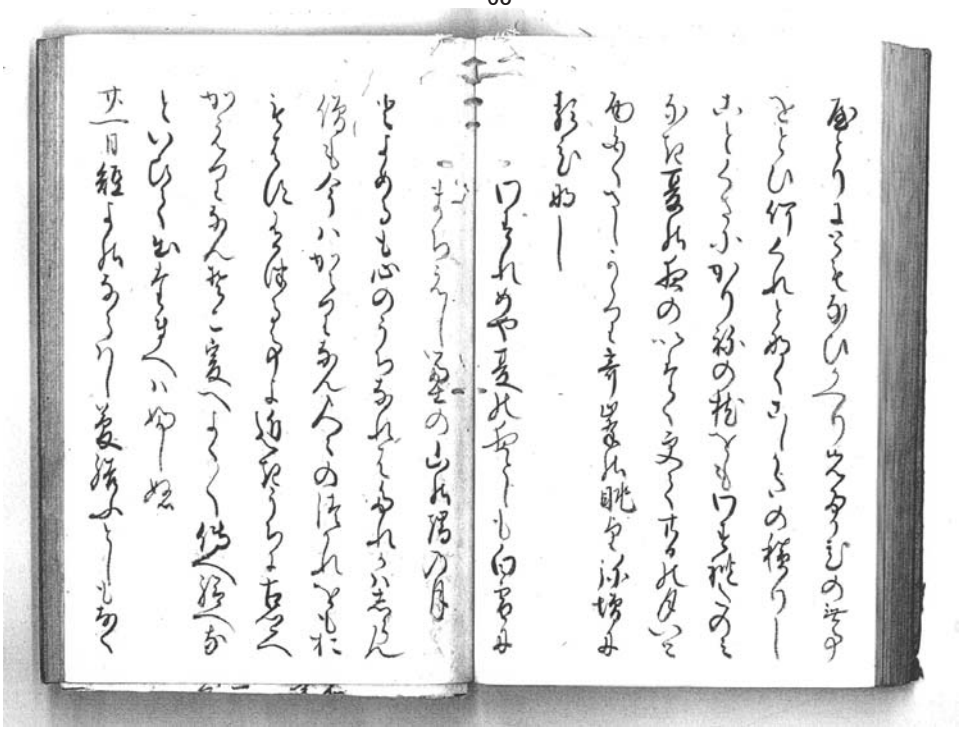
62　61



（46オ）　（45ウ）

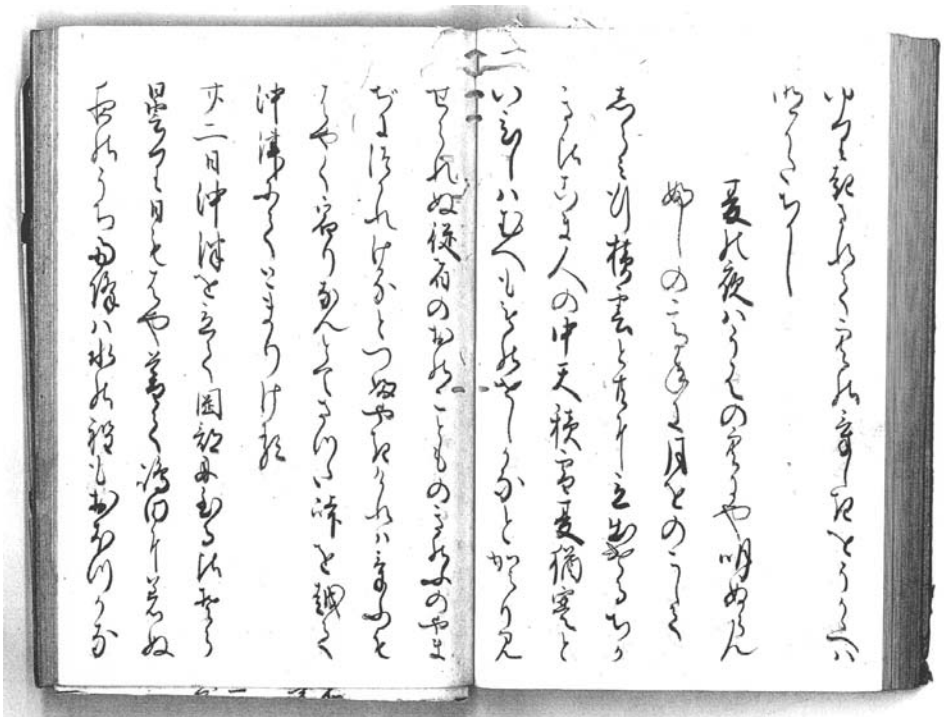
八八

63



（47オ）　（46ウ）

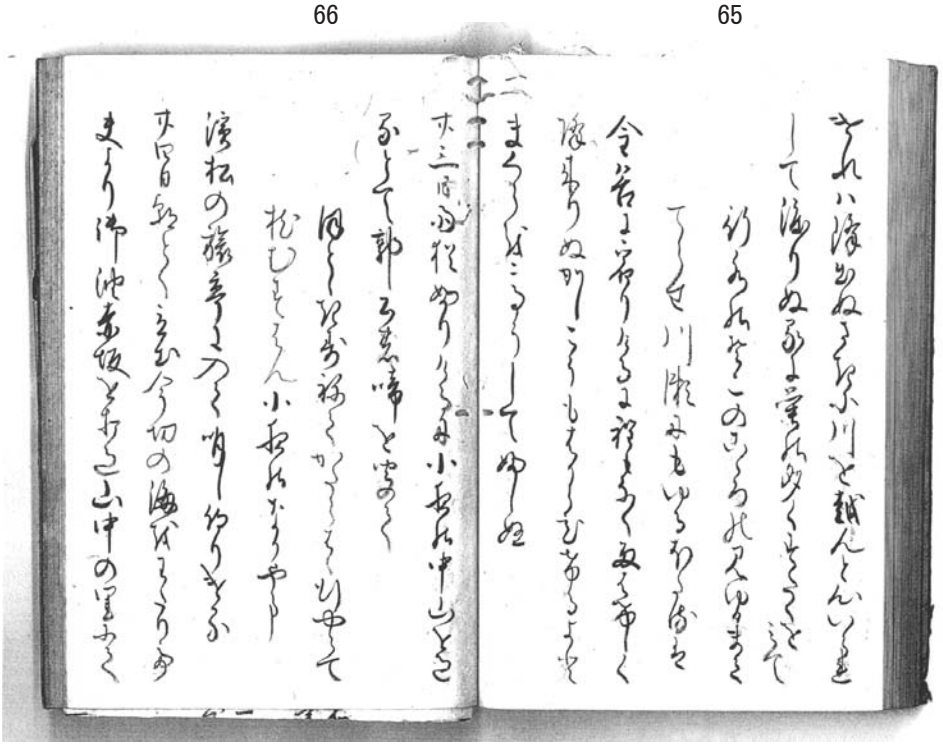
64



（48オ）　（47ウ）

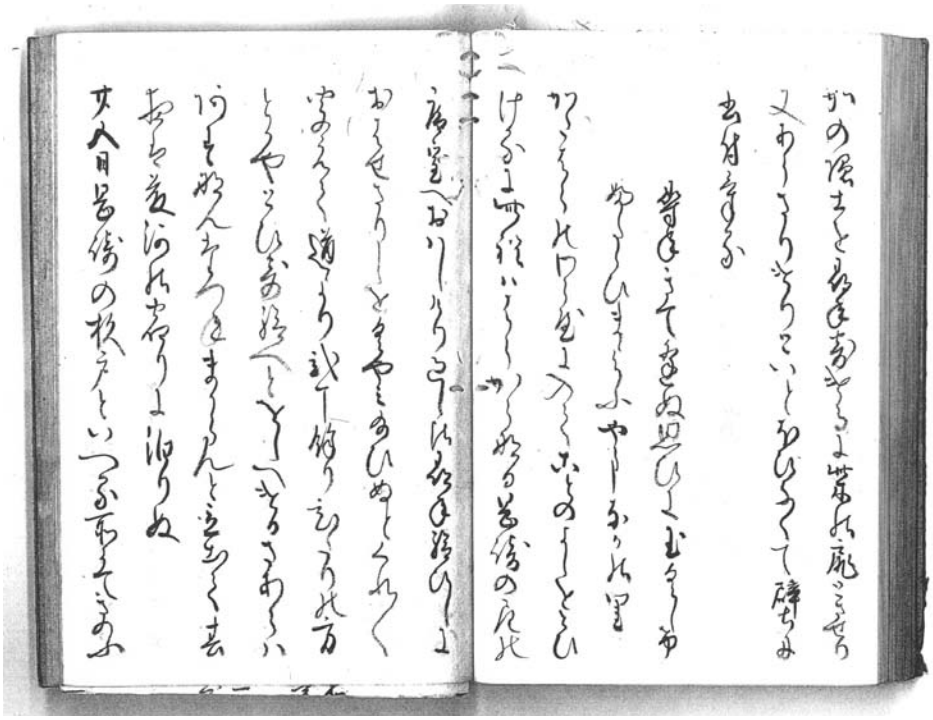
八九

66　65



（49オ）　（48ウ）

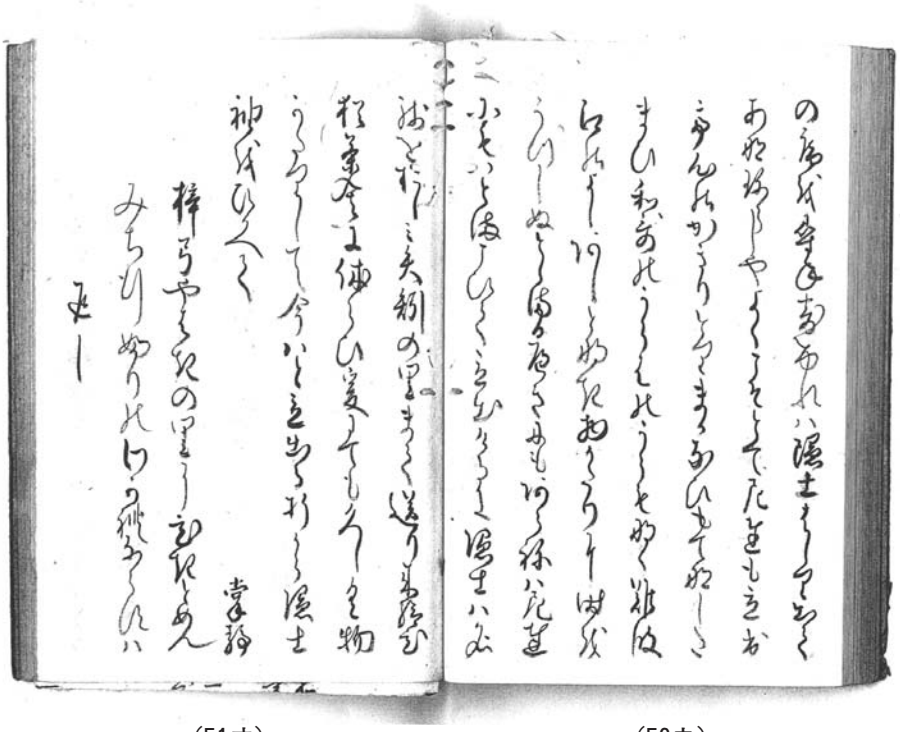
67



（50オ）　（49ウ）

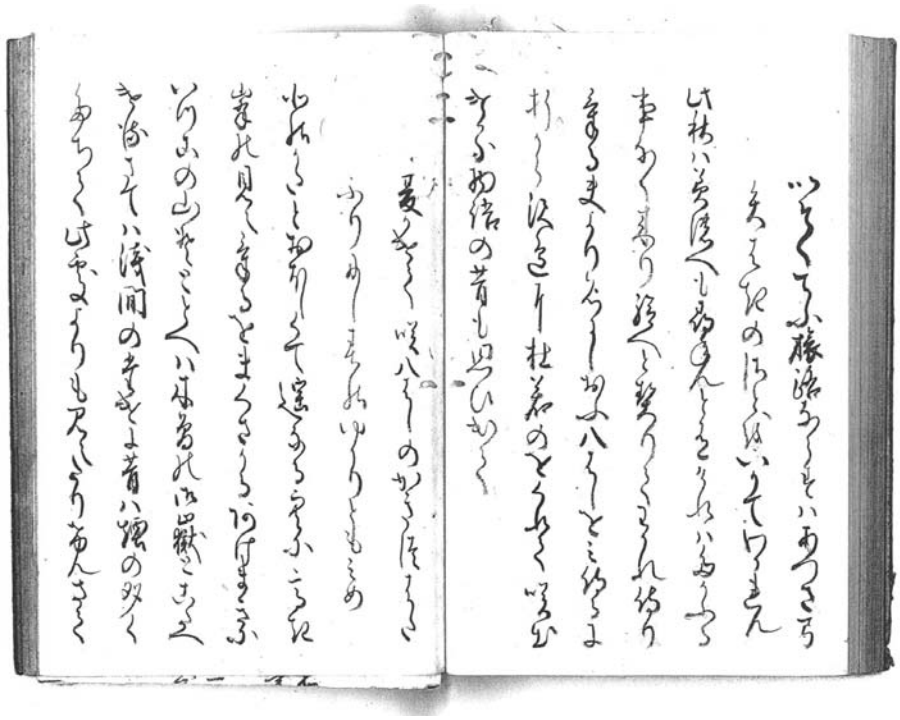
九〇

68



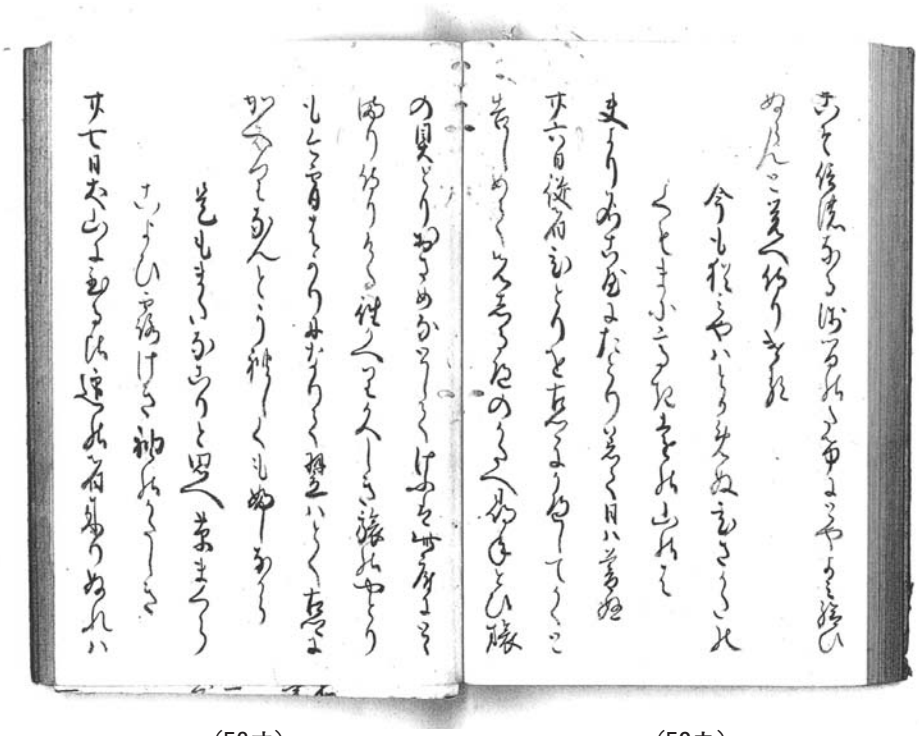
（50ウ）　（51オ）

69　70

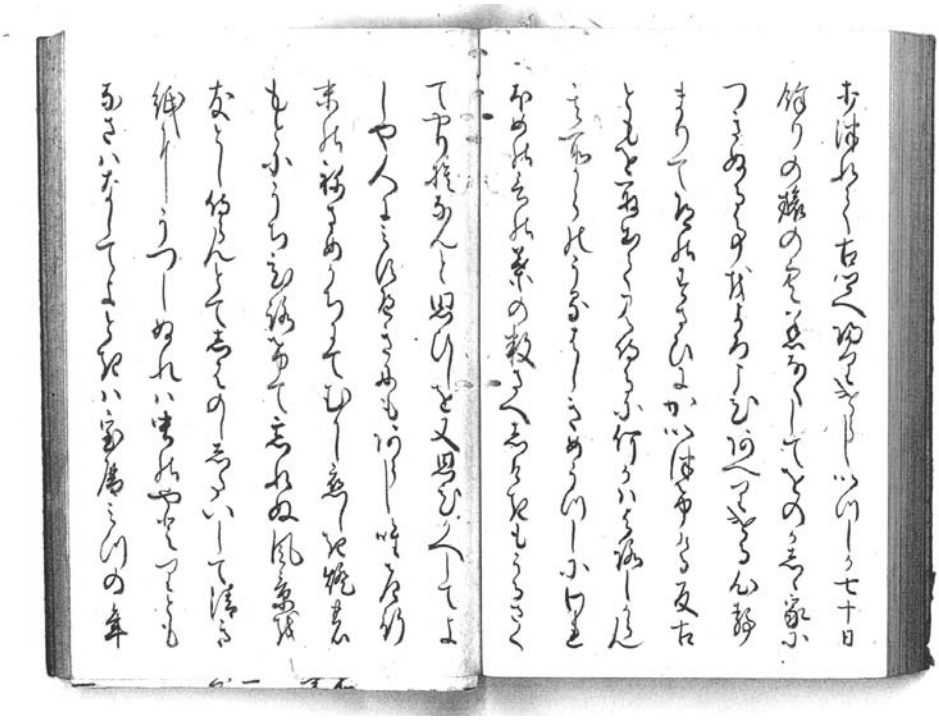


（51ウ）　（52オ）

72　71

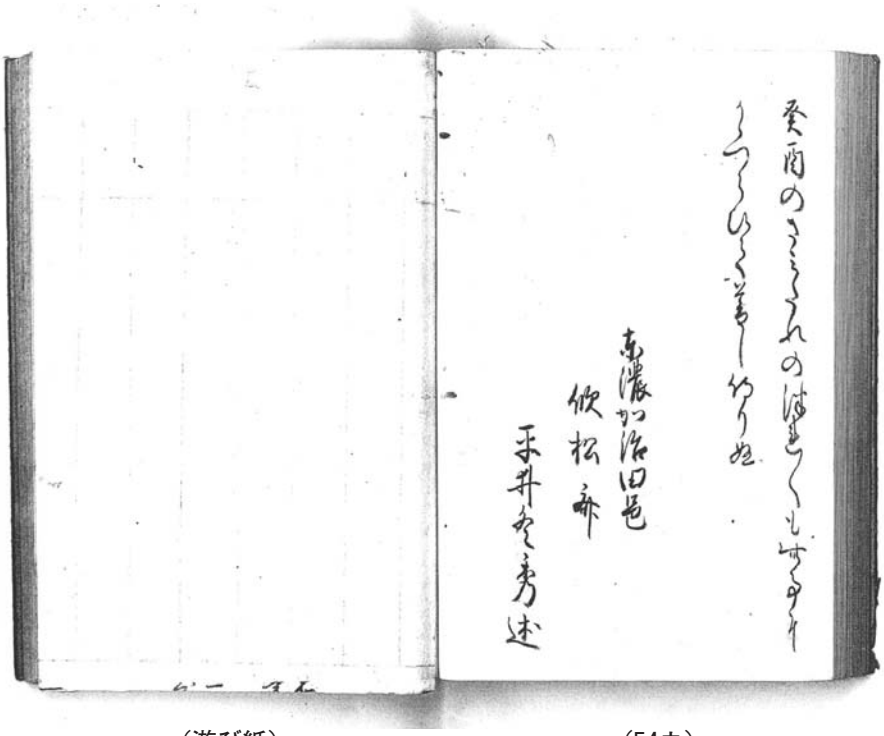


（53オ）　（52ウ）

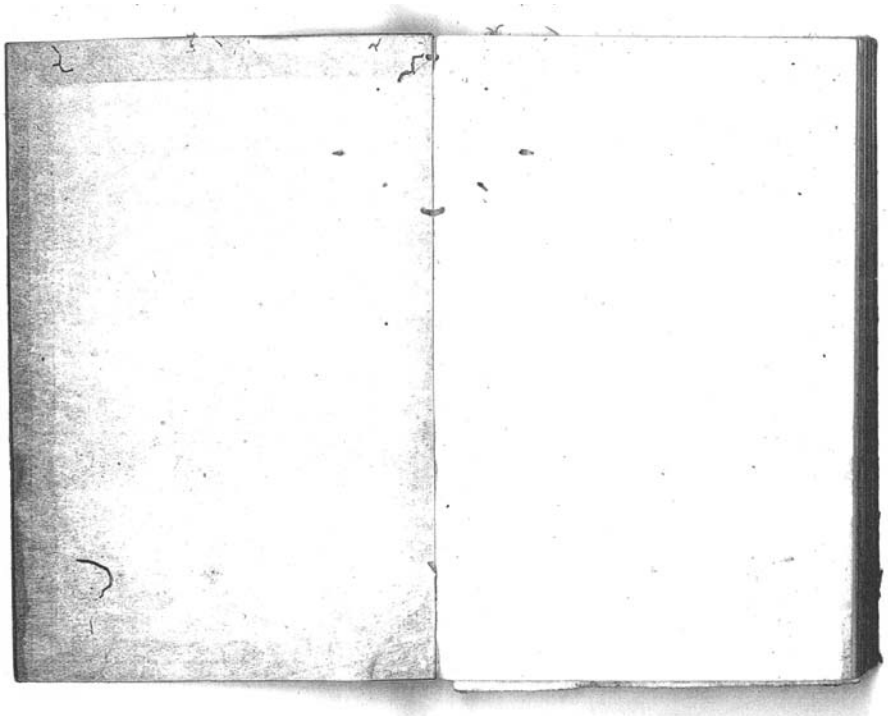


（54オ）　（53ウ）

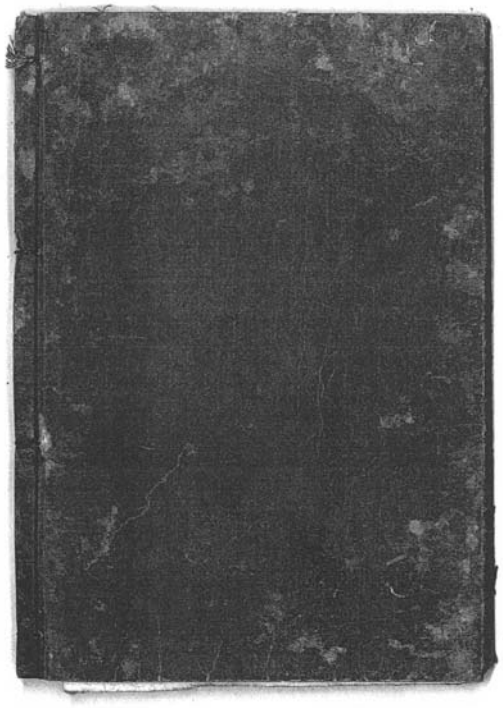
九二



（遊び紙）　（54ウ）



（後表紙見返し）　（遊び紙）



（後表紙）

【翻刻】

吾妻道の記

きさらぎの頃、東都にくだる事になんなりぬ。もとよりまかせぬ公の事なりければ、いつ帰りこん程もはかりかねて、父母は旅の労りなど思ひつづけ、ならはしのくり言に心をいためけるをことよくつとめ、まめやかにかへりなんといさめ言して中の五日に旅立とて、

1　うしとのみ今はおもはじ日にそひて
　花になれゆく旅のころも手

その日は尾張の国なごやにつきぬ。とし頃相知る宿なれば、あるじともむつまじくうちものがたらひてふしぬ。

2　行末の遠きたびねやいかならん
　なれにし宿もゆめは結ばず

十六日。熱田の駅路に出ぬ。源太夫の御神は、」（1ウ）東海道の旅人を守らんと駅にとなりて宮居し給ふとかや。先御前に参り、道の手向して、

3　あふぐぞよ朱の玉がきたまぼこの
　往来もやすくまもるちかひは

星崎なる笠覆寺の観音菩薩にまうでゝ、

4　降雨のうきをしのがん御仏の
　ふかきちかひにもれぬ笠寺

けふははや故郷の山の端も見えずして、三河の国も近く、鳴海の里を過るとて、

5　白雲の幾里へだてど鳴海がた
　やゝ遠ざかるふるさとのそら

茶舎に立寄、かれいひくひてやすらふ庭に梅のいとおもしろく咲ければ、

6　たび人のしばし休らふ袖にしも」（2ウ）
　うつせとあまる庭の梅がゝ

三河国矢作の里に至りぬ。道の左りの方の田中に孤松あひしげりて、ちいさきやしろの見えたるを、いか成所ぞと其いはれゆかしくて、馬の口とるおのこにとへば、あれなん長者が住し跡とて相生の松なるよしかたり、猶爰かしことひて、やはぎの橋をわたるとて、

7　踏ならす駒の綱手のながき日に
　かすみわたれる里の川はし

空のけしきいとくらう成て、しきりに風立、雨のあしとく降ければ、岡崎の宿に日高くとまりぬ。猶翌の空いかゞとおぼめかる。

十七日。雨そぼ降ければ、雨の具取したゝめて出行。山中の里に世をのがれ住る道寿斎」と（3ウ）いへる隠士ありける。年頃天飛雁の便りにつけ、道の心をかよはしむつびける。旅行のつてにはかならず尋ねよと契りをきし事のあれば、此十日余りさきにかくなんと告置しかば、とばかりの晴間うれしく尋ねよりしに、杖を出せし折からなれば、むなしく庵の軒にたゝずみて、

8　とはれじのこゝろからすむ山中に
　あらぬうらみの言の葉もなし

柱にかいつけて立出。ゆく〳〵しほみ坂より眺望すれば、目にさはる

山のはもなく、南の海原遙に見わたされぬ。

9　かぎりなき浦に生てふめもはるに
　いさまたしらぬ沖つしほあひ」（4ウ）

汐見坂より空もやう〳〵晴渡りぬ。故郷にては、見馴ぬ磯づたひぞめづらしき。高師山の麓を過るとて、

10　雨雲のはるゝ高師の山まつに
　にほふ夕日の影ぞいさよふ

八とせまへ行来せし折からは、浜名の橋の跡をとひもらしぬれば、かたはらの田かへすおのこに尋ねしかば、すきもてつゝ杖づきて、とし久敷爰に住侍れば、我こそよく案内はしりぬれ。そなたにあたりてかたのやうに残れる所こそはしの跡なれ、と指さしをしへて、是よりは道の程すこしたがひたれば、名ゆかし高師山は、あとのかた成しがしれりや、としたりがほなるぞ、いとにくゝおもほゆ。」（5ウ）

11　今は猶わたり絶にし橋ばしら
　くちぬ浜名の残るものから

けふは何とやらん心地例ならずなやましくて、あらゐの宿にやどる。用意の薬などたうべて、ともなふ人々にいたはられて、埋火のもとによりふしぬ。

十八日。今切の渡し船のりて行。是より富士の高ねのみゆると、かたはらの人のいへれど、浦風のはげしく、身にしみわたりぬれば、頭をも出さず舟底にくゞまり臥たる心地、いとむくつけし。棹の寄浪の響に夢を結ぶともなく舞坂に着ぬ。夫より見附の駅を過るほど、鶯の啼を聞て、

12　憂旅もしばしわすれつ故郷の」（6ウ）
　こゑにかはらぬ野路の鶯

13　香にめでゝ梅あるかたへうかるなよ
　われにともなへ鶯のこゑ

物わびしくて、けふはかゝること思ひつゞくるとしもなく、かろふじて懸川に仮の宿りを定めぬ。

十九日。小夜の中山にて、

14　春ながら衣手寒し朝露の
　かぜにみだるゝさやの中山

大井川の辺りに至れば、打むかふ山〳〵のゆき解にて、水かさ増りしといふ。誠に瀬に立浪のすさましさ、望みるだに目くるめきて、此川なかりしかばと皆人思ひあへり。空の景色俄にかはりて雨もつよく降きぬ。とくわたれかしと里人にいさめられて急ぐも」（7ウ）そゞろなるめを見る事よと、おどろ〳〵敷もわたりこしぬ。

15　今ぞしる世はうきことの大井河
　あやうきながらわたりくらべて

いとふ雨降出ければ、いやましにわづらわしくて、たどる〳〵岡部の里に着て宿りぬ。しとゞにぬれて来し旅の衣かたみにしぼりつゝ、はやくつかれを休めんなど人のいへれど、身はきえまどへるばかりくるしさ増りて、末遠き東の空、はてしなき旅の道のいとゞ心細しや。かくてしゝこらかしなば、猶いかゞあらんと人〴〵いひもてさはぎつゝ、かうやうの事と宿のぬしにつぶやきけるにや、あたりなるくす師の来りて薬の事などすゝめて」（8ウ）帰りぬ。ひと〴〵はさらなり、あ

るじもともにねもころにいたはりもてなしければ、情あるわざかなと嬉しくふしぬ。

廿日。暁の鐘におどろかされてや、おのこどもの起出て、けふも雨のをやまぬよとにが〳〵しげにいふ声にふと目覚ぬ。折からおんなの出きたりて、きのふの雨にてよべの戌の刻より安倍川の渡りとまりければ、今より立出給ふとも詮なきことゝいふ。こはしちなるや。さもあらば水のひきく成をまつとて山をひとつ越とも、こさずとも、なでう事なからん。ことよき爰にてまち合さんと、又夜の衣引かぶりしづまりぬ。程へて人〴〵をゆりおこし、よべのくす師のかり人をやりければ、」（9ウ）しばししてあるじのともなひ来りていふやう、いたづきの身の此雨にぬれしほたれ給はんよりは、川の越とまりしを幸にしてとゞまり給へ。雨の脚も静に成ぬれば、翌は川口あきなん。心しづかに身を養ひ給へ、などせちに聞へける。さやうあるべきくすしとも見えざりしが、しるしありて夜に入ほどには、いと心よくなり侍りぬ。実道祖神のまもらしめ給ふにぞと有がたくおぼゆれ。

廿一日。此程は身もあつく、かしらいたくものもすゝまざりしが、今朝はかゆやうのものたうべて、何かにつけ少しこゝろよく、殊さら空も晴間に見えければ、かくてはあらじとやどりを立出るとて柱に、」（10ウ）

16　わすれじな岡部の笹のかりまくら
　　一夜ふたよの深きなさけは

宇津の山をこゆるとて、

17　村雨にぬるゝ若葉の蔦かづら
　　くるしくのぼるうつの山道

彼川の有さま尋ねつゝ行けるに、われたちこそ今わたり初といへる旅人にあふ。さては程よくも来るやと、よろこばしくことゆへなく渡りて、駿河の府に至りぬ。いつしか空も名残なく晴れわたるけしきにつれて、心ちもいさましく、行〳〵清見寺に詣ふで、夫より海道に立休らひ眺望に時をうつしぬ。

18　何にかくこゝろをとむる清見がた
　　華も若葉もなみの関もり」（11ウ）

釣船の行かふさまとり〴〵にして、いかなる風情も出きぬべき所のさまなれど、富士の煙の行ゑもしらぬつたなき言の葉をいひつゞけんも、田子のうらなみ立かえりはづかしとてやみぬ。夕暮かけて菅原の駅にたどり着、仮の宿りにとまる。

19　音高きなみのよる〳〵みつしほの
　　さすがわすれぬ故郷のそら

廿二日。暁ふかく立出ぬれば、岩淵といへる所にて夜もほの〴〵と明ぬ。

20　霜こめて麓はそれと白雪の
　　ひかりにはやき富士のあけぼの

いにし年の往来には八雲覆ひかくして、うき嶋が原のうき事に思ひしが、けふは長閑に晴わたりぬれば、見あげみおろしあくともなし。」（12ウ）

21　花と見ん吉野ゝ春も梺にて
　　ちらぬためしの雪のふじのね

三嶋のむまやに申の刻ばかりに着て宿る。

廿三日。箱根の山路に登る。余寒の風はげしく吹て、峯はまだ雪いと高し。

22　みねにのこる雪をさそひて山風の
　　吹敷はるの華かあらぬか

湖水の面も彼かしこ氷とぢて、うち出る浪のはつ花とながめしもかゝらましとおもへど、春としもなき寒さにさへられ、心とまるとしもなくたどる〳〵過るに心なづみ、あゆみかうじながら、畑とかやにくだるに、日もはや暮ぬれば、松ともしてからうじて小田原に着ければ、そやをつきぬ。」（13ウ）

廿四日。小田原の宿を立出、大磯にさしかゝりぬ。いつの頃にや有けん、こうずの人、此駅の入口なる小川の辺りに一宇を建置て、西行上人の御影をかけ、流れの中には鳴立沢と石にきざみて、たてをけり。近き頃、やんごとなき御方の御哥に、爰をのみ鳴立沢とながめをかば、心なき身と人やいふらんと詠じさせ給ふよし聞けり。夫よりこゆるぎの磯を通るとて、

23　旅衣しほれて爰をこゆるぎの
　　いそ菜つむてふ袖にくらべん

入馬川を渡りて来しかたをふりかえりみて、

24　見物せし日数も今はしら雲の
　　はれておどろくふじの山の端

戸塚に行暮ぬ。翌は朝とく出立、武江に」（14ウ）つかんとそのことしたゝめふしぬ。

廿五日。八声の鶏とともに立て急ぎ侍る。品川の海辺に至りて千船、もゝふねの入つどふ東都のにぎはひをうちながめて、

25　舟人も治る御代の時つかぜ
　　真帆にかたほにかけてあふがん

夫より築地の主館に着て、御けきしきをうかゞひ奉る。仮住の所へ入べきよし下知をくはへられけれども、心にまかせぬ事のみあらんと、兼て思ひはかれる知べの方の町ずみになさしめ給へと人して願ひ奉れば、いたう心をくべき事も覚ぬ物を何によりてかゝらんなど、ねもころにのたまへど、猶ひたすら申あへるにゆるし給ひて、日本橋近き伊勢町の」（15ウ）知べの方へ移りぬ。あるじ立出て、かくとしらせの有つるより、けふやくとゆびをおり待わびしよしいひて、もと見したれかれ寄つどひ、あなめづらしなどいひあへりければ、よろづに心やすくおち居侍る。

26　たび衣きつゝうらなきむさし野ゝ
　　草のまくらもゆかりありけり

ひと日ふつかのほど、旅づかれをやすめつ。夫よりは、公事にかゝづらひ筆とるべきいとまもなくて暮しぬ。

きさらぎもすぎ、程なく上巳に至りぬ。君家のことぶきつとめて、雛のおほみき給り、多く祝する事侍りければ、

27　寿きはげにみ千と世の数〳〵に」（16ウ）
　　くむともつきじ桃の盃

浅草の辺り成軒端に桃さくら植渡して、この頃盛りなるよしいへれば、公事のいとまに友とする人、みたり四人彼里に行て繁花の賑ひ打なが

め、酒たうべて、

28　うつしうへて花の契りも深かれど
　　色香にうとき人も待らん

ひと日、東叡山の花みんとまかりて、

29　梢には吹もさはらで香に匂ふ
　　はなのうへ野ゝ春の山かぜ

不忍池の辺り逍遙しけるに、みわたしの中嶋に八重山ぶきの咲ければ、

30　口なしにしのぶとすれど忍ばずの
　　池のやまぶき色に出けむ」（17ウ）

湯嶋の天満宮に詣でゝ、

31　咲華の錦も神の御こゝろに
　　手折ずとてもぬさとならまし

三月十五日は、梅君の忌日成とて、人々いざとすゝめらけられければ、まうでみるに貴も賤も老も若も袖をつらね詣で集りながらも、念仏の声の何とやらんものがなしく、世語のむかしもしのばれ侍る。

32　植をきし涙のたねのたえずなを
　　けふをとひよる青柳の糸

それより隅田川の流にそふて船のゆきゝを眺望して、

33　角田川霞ながるゝはるの日も
　　くれぬといそぐ入相のかね」（18ウ）

飛鳥山の花、今を盛りと聞て例の友どちに誘はれ行侍るに、花のけしきもけふこずばと思はれ侍る。爰かしこの桜の陰に幕うちまはし、酒のみ舞諷ふありさま、目をおどろかすばかり賑へり。

34　けふをせと咲る色香のうつろはん
　　あすかの山の華をしぞ思ふ

かつ〴〵散をおしみながら猶見てのみ人々にはかたらじ、つとにもやと立よりて、

35　見ぬ人のためにと思ふ一えだも
　　あたら色香の花のしたかげ

かくいひて折しもやらず過ぬ。

ある日浅草の観音にまうでし折から、茶をうる床にしり掛て何くれとなく興じあへり。」（19ウ）

36　くるゝをもしらでながむる花の陰に
　　心はちらぬいりあいのかね

ふるさとに尋ぬる事のあなれば、文書てのぼせぬ。返りごと聞までは十日余りもや、其程は公の勤とてもなければ、いさや此いとまに日光山へまうでばやと主館へ至、願のよし告奉り、此の地よりもひとり二人友をもうけ、弥生のはつか余りひと日の朝、下野の国へ赴く。専集の駅を過、道のかたはらに一木ある桜のちるをみて、

37　是もまたうき旅衣いろそひて
　　やすらふかげに花ぞちりかふ

此駅路は、みちのくへ通ふちまたにて、旅人も数なく物さびし。すべて武江より地は平にして、」（20ウ）日光山の麓までとばかりの山路もなく、家のしつらひ人のものいひとてもことかはり、みるにつけ聞くにつけていとゞひなびたるさまなり。さつてとやらんいへる所にして日はいりぬ。

廿二日。雨ふりぬれば、わびつゝも行。霞がくれのみぎりのかたに高くそびへたる峯をとへば、常陸の筑波山なりとこたへぬ。

38　春雨のしづくの田井も思ひやる
　　つくばのみねにかゝるうき雲

道の程一里余りも暮てやう〳〵雀の宮とかやに塒もとめぬ。

廿三日。よべのけしきにはことかはりて、そらよく晴たり。宿りを出て野辺を過るとて、

39　なれもさぞおどろきぬらん霞むのゝ」（21ウ）
　　行て間ぢかくきじの鳴こゑ

日光山も見え渡れば、心もいそがれて、程なく山口成今市とかやに着ぬ。夫より松原町、鉢石町などいへる町を十丁余りも過て、大谷川の辺りに至りぬ。橋ふたつかゝれり。右の方は常に人馬の住かよふ橋なり。左のはしは七社明神勧請あなるとて、不浄をいましむ。台駕渡御、又は当山のす行者山籠りのかへるさならでは、渡さぬよしをいへり。往昔、勝道上人初て登山し給ひしに、此所に至りて橋もなかりしかば、いかゞして渡らんと行なづみたゝずみおはします折しも、深砂大王忽然と現し給ひ、青赤の二蛇を放て橋となさしめ給ふ。猶も上人あやしみゆうよした」（22ウ）まふ時、かたはらにあげまきありて山菅を苅、蛇身を覆ひかくせばやすくとわたりて、此山をひらき給ひしとかや。さてなん今も橋の名を山菅の神橋といへりとぞ。朱にぬりかなものきら〳〵敷厳然たり。

40　名にも似ずかくはわたせし山すげの
　　かりそめならぬ谷のかけはし

かたじけなくも此御山は、人王四十八代称徳天皇の御宇神護慶雲元年勝道上人、二荒の二字を日光と改開基あり。猶とし経て弘法大師、慈覚大師登山し給ひ、所々に神社仏閣を建そえ給ひしとなん。夫より星霜八百余歳を経て元和の頃、太祖神君御鎮座あり。新に宮柱ふとしきたて、神威海内」（23ウ）にかゞやかし給ひ、たときとなくいやしきとなく参詣群をなすの霊山也。三囲四囲余りの杉のむら立生茂り、見るにいとかうゞし。西谷成埋宜坊といふに着、そこの案内にまかせ、神はしのひだりの石畳を登りもて行ば、御本坊輪王寺の宮、御殿作りの地などの前をうち過ぎ、朱の瑞籬影うつるばかりまばゆし。御額は
　　後水尾帝の御震翰とかや。夫より石の花表に入、五重の塔を拝す。御宝前は此ほどみすり（ママ）にて、御仮殿に渡らせ給ふ。かたじけなく再拝し、いやしき身のはゞかりありとおそれみつゝしみながら、

41　かゝる世にすめるもうれしこの神の
　　恵になびくうらやすの国」（24ウ）

42　山の名をあふぐも高し日のひかり
　　ひとしくてらす神のめぐみは

社頭はあぼふ丸、あらめ石などいへる大石もてたゝみあげたり。其上の御門よりして、のこりなく御修営あり。数多の堂社たちならび、此国の諸侯大夫は更なり。遠つ国々よりつゞけ奉りし御灯籠とりゞ也。聞及びにしにも思ひわたりしにも増りて、たうとくいはん方なし。彼につけ是につけ、目とまらぬ所しもなくめでたく侍りける。相輪樘の前に至りぬ。この銘は伝教大師六十四句の文をえり給ひ、甚深微妙のくどくにより、ひとたび此風にあたれば、空をかける鳥類、地をはし

る獣にいたるまで仏果をうるとなん。」（25ウ）ひゑの御山をはじめ、六十余州御いのりのため、日の本六余に建給ひしとかや。いとたうとく覚え侍る。新宮の鳥居を過、三仏堂の伽藍を拝み、夫より新宮の広前にぬかづき頼朝公の遺骨をおさめ給ふ常行堂、法花堂など順礼してゆく〳〵女体山中宮に登り、三本杉といへる霊木」（26オ）をみめぐり、道すがら堂社多く拝して、本宮に至りぬ。とりわき神徳広大にわたらせ給ふと聞て、おほけなきねぎごとして、

43　かしこしな神のちかひのめぐみにて
　いのるにも猶杉の下かげ

数しらず拝みめぐりし神社仏閣の地にこえて、なみ〳〵ならず爰かしこにかゝれる」（26ウ）御額も代々の帝の震翰ならざるはなし。まして奇瑞の跡とて、いくらともなくみ侍りしかど、余りにこと繁ければ筆をとるにいとまなくもらしぬ。

東照権現宮をはじめ、日光三社の順参も終りければ、御別所といへる御寺の岡に出て眺望すれば、大谷川の流は末遠く、橋の行来は眼の下に見え、もと来し市陌は麓遙かに連なり、東谷西谷の寺院いらかをならべ、外山にくら山などいへる山々は、まのあたり見わたされぬ。山高ければ、常にくも霧深き処といへど、けふはことさら空はれて景望いはんかたなし。中にも黒髪山は名にも似ず雪いとしろうはるかにみゆ。」（27ウ）

44　白妙の雪はのこれど峯高み
　くろかみ山の名こそかはらね

打むかふながめのあくとしもなけれど、日は入ぬ。宵やみの道たど〳〵しくて、そやの頃、坊舎に帰りぬ。けふみし所々を語りあはせて、そこにはさありしといへば、それはかしこにこそとあながちにあらそふもけうあり。さはいへ、かぎりなく遠くも来しよとおのが心〴〵に思ひいづる事ありてや、ふしめになるもうるさくてふしぬれど、梢をならす嵐はげしく、谷の水音枕にひゞきていほねられず。

廿四日。けふは中禅寺に登らんと朝とく出ぬ。先西町といふを過行。市の中に大成巌あり。勝道上人、中禅寺湖へ通ひ給ふ折」（28ウ）かりの休らひ所とぞ。蓮の形せし岩なり。是によりて町の名も蓮花石町といへるとなん。出はなれ行左の方に木しげき森有。水清くわき出る。地形は亀の伏がごとくにて、乾とおぼしき方へ頭をむかふ。此嶋の上に大日千体仏など安置す。誠に世にしらず深く愛しつべき所のさまなれども、猶行べきかたなきにしもあらねば、とゞまりがたく、それより山路を登り清瀧とかやに至る。瀑泉のかたはらに権現宮まします。清瀧寺といふ精舎ありしも近きころ火のために亡びぬとて、礎ばかり残れり。六七丁行て、観音堂あり。此御仏は、中禅寺立木の尊像のすゑの木にて、上人きざみ給ひ」（29ウ）しとかや。中禅寺は、女人を禁じ給ふ地なれば、おんなの結縁のためとて爰に建給ふとなん。駒返しといふ村に至りぬ。此処よりして牛馬も登せず、女人も入ざるとき く。里を過て、日影もくらき幽谷をながれにそふてのぼり侍る。源は中禅寺湖水にして、大谷川の上なり。大成巌いくらともなくさし出、行なやむ。水音物すごく、石をつたひ岩根をめぐりて、いとらうがはし。殊にあやうかりしは、谷の爰かしこに丸木を渡し、木の枝、間遠にあみつけはしとなせり。かのさかまく浪のうちかゝり、足の踏どこ

ろもしらず。めくるめき魂も身にそはず、おほかたのむく〳〵しさたとへなし。

45　かたばかりあやうき道はふみもみず」（30ウ）

聞もわたらぬ谷の柴はし

不動坂とてけはしき坂有。登るものはたをれぬべく、おるゝはまろび落ぬべしや。ただ掌を立たるがごとくにて雲に分入かとあやしく思ひながら、木のね岩角に取附からうじて峯に至れば、不動明王ぞまします。是よりは平にして峯吹風、春としもなく肌にしみわたりぬ。中禅寺と申は日光より三里を登り、三社の奥の院なりけらし。男体山共いひて、黒髪の半なり。此山はさつきの末より秋の半までは、参詣の緇素も絶ざれば、程よく茶を煮るやどりもあるときけど、かゝる折は、ともなふ人々ならでは知人もなし。花より外にと詠じさせ給ふもかゝる所ならめ。一木も□（虫損）と」（31ウ）うち見るかたに白うほのかなるを、あはやとよくみれば、ふりたる木立に雪のさし残りたるも□（虫損）すかに哀とぞ思ふ。道すがら世はなれて、をざゝわけ行もすゞろに心ぼそく、

46　花のさくころとしもなく佐保姫も

よそに深山の木々のこずゑは

女子石とて、人の姿なる石あり。昔ゆるしなきにおんなの登りて立所にかく成はてしとなん。又牛石とて、うしの臥たる象せし石あり。鼻づらとおぼしき所を藤にてつなげり。たはむれに、

47　浅ましき名につながるゝ藤かづら

みるだにうしとおもふ巌ぞ

行々湖水はてしなく見渡されぬ。およそはゞ」（32ウ）壱里、或は弐里にして、三里あまり遠方へたゝへし湖水となん。まん〳〵として、いとものすごし。岸をつたひ、補陀落山中禅寺に着ぬ。御まへを歌の浜といへるとかや。当社大権現と、上州赤城明神と御神軍あり。此所に勝軍のかい陣あって、諸々神万歳をうたひ給ふゆへにかくよべりとなん。手あらひ口すゝぎて、

48　見るからにこゝろぞとまる峯高み

なみと雲とのかゝる水うみ

此湖水のうちに寺が崎、上野嶋、千手のはま、紅葉が浦、金がわたなどいへる其所々に神社仏閣を建、水無月より文月までは一七日御寺に籠りものいみし、船禅頂とて船に乗、岸毎の拝み」（33ウ）所巡礼し侍るとなん。汀に小船多くつなげり。すべて此山は大成湖三つ、ちいさき湖ども四十八湖あるよし案内する者のいへり。かゝる高き山の頂に数多の湖の有事も、霊山のしるしかやとおぼえ侍る。浜の地蔵といふ有。夫より鳥ゐを過て鐘楼、不動堂、妙見のやしろ、本社の拝殿にならびて、観音の御堂有。上人、立木をそのまま彫刻し給ふ菩薩の尊像となんいへりける御宮所にぬかづき奉りて、

49　跡たれし黒髪山の神がきに

ゆくすえながく身をいのらまし

三重塔など、のこりなく拝みめぐりぬ。諸堂摂社に至るまで、とりわき厳然ときらび」（34ウ）やかにして見所多し。殊勝なる事、言葉にも筆にもおよばず。只信心肝に銘じて、たちまち汚濁の心はなれて、物我の隔をわするゝの霊場にて、日の本は更なり。異域にもかゝるたぐひはあらじと、たうとくおぼえ侍る。

50　木々のかぜさえづる鳥も法の声
　　ちりの世ならぬ峯のふるでら

御寺のかたはらより、男体山の絶頂に登る道あり。四十八日の行ひ勤めて、文月七日に登山するよし、坂口に補陀落山の記とて碑の銘建り。また湖水の岸伝ひに道有。是より奥にめいよの温泉ありて、夏に至れば湯あみのともがら群集し侍るとかや。道すがらも湖水のながめ、其外心とまる所」（35ウ）多しといへども、爰だに余寒たへがたきに、まいておく深く分入べきにしもあらねば、めこ石の辺りにかへり、夫より華厳の滝へ至りぬ。此瀑泉は、中禅寺湖水の流れにして、其丈四十七丈あるとなん。久かたの空より練絹を掛たるがごとく、さかまく水の煙は晴夜にことならず、とゞろく響は、鳴神よりもおどろ〳〵敷、寒風はげしく吹て物冷しさ、ひとへに仙境に入しかと謬たる。一里余り行て荒沢といふ。爰にも瀑泉ありける。瀧のうしろの方に不動明王おはします。巌にひそみそふて入許し侍りぬ。此瀧は、うしろより見れば、裏見のたきといへりとぞ。此地にも雪ありて嵐はげしければ、立どまるべくも」（36ウ）あらず。寂光といふ所は、浄土を表し、尤閑寂の地にていとたうとし。そこを出て、関東の高野山なりと里人のいへるかんまんとかやに至る。此所は神橋の河上大谷川の流れにそふて、慈雲寺といふ梵刹の境内にて近江の石山にひとしく、巌のさまことかはり奇麗也。弘法大師一夜に作り給ふとて、石体の地蔵尊其数をしらず。ところせく有けり。霊庇閣骨堂などをはじめ、奇瑞の跡とぞきく中にも、大師護摩を執し給ふ所とて、平か成巌のうへに釜の形を彫り、其下水藍のごとくたゝへ、かんまんが淵といへりとぞ。向の岩の面に大師投筆のあととて、憾（ママ）鈴の二字あり〳〵とすはれり。」（37ウ）

51　世々経ともくちぬ御法のためしには
　　いはほにのこるみづくきのあと

かくて所々順礼終れば、日もはや申の刻ばかりに成けらし。宿坊に帰り、いとま乞ふにけふは、とゞまりてあすなんかへれと住侶のせちにとゞめ給へど、急ぐ心なきにしもあらねば、むげに心強くいひはなちて、日光山を下り徳ぢらといふ所へ夜に入て着ぬ。

廿五日。徳二良の宿りを立出ぬ。彼宝の八嶋のみまほしかりしかば、かれにとひ是に尋れど、或は宝といひて繁昌の市陌あり、是にや。さあらば七里ありといひ、又は三四里などいへるもありて、さだかにしれるもなし。人々はけふのやどりへといそぎぬ心のひとしからぬもにくければ、」（38ウ）

52　なれも今草のやどりへいそぐらん
　　夕べのそらにひばり鳴こゑ

小山の駅に着、やどりける。

廿六日。よべより雨降出て風立ける。此あたりにも名だゝる所々のありとしらねば、心とまるとしもなく、旅のよそひの雨にしほれ、わびしきのみにて粕壁と云に至り、仮の宿りにふしぬ。

廿七日。けふ武江へ着ぬと朝とく立出。専集の宿に至れば、橋の辺りにて江戸への船にのれといふ。興有なん、よせよといひつゝ打乗て程なく隅田川に出ぬ。故郷の事共いひ出る折しも、物語のむかしも思ひ出られける。浅茅が原はそこよ、桜若の森はこなた」（39ウ）よなど船人のゆびさしをしへて漕行程に両国の橋も過て内壙へ入、やがて江

戸橋に着ぬれば、舟よりあがりつゝ、いとうれしく例の宿りに打連て入ければ、あるじ出合思ひがけずもとく帰りしことよ、あすは専集へ迎に遣んとさゝへとり出、むつまじきどち契り置しも、他に成ぬると、いといとうたれかれももてなしきこえぬ。

廿九日にてや有けん。例の人々来りて深川の三十三間堂新に造栄ありて、此程矢数の稽古はじまりぬ。いざ見にまからんとすゝむれども、旅の労れやすからずすまひけるを、船にて行んに何かはくるしきとしゐてすゝめられ立出ぬ。八幡宮の御まへにて舟よりあ」（40ウ）がり、広前にもうで、二軒茶屋といふに休らひみれば、庭には山を高うし池を深ふし、其上に棚かきわたし、藤かづらをははせて、おかしくしなしける。花も今三日四日あらはと見えていとおもしろし。夫より三十三間堂の辺見めぐりて、洲崎の弁才天に至りぬ。茶店の二階にて酒たうべて、ひもねす海の面をはるかに眺望して、

53　立こめし霞ふきとく浦風に
　　ほの〴〵みゆる沖のとも船

行くれとなく弥生もけふをかぎりに成ければ、

54　根にかへる花をし思ふ旅衣
　　なれぬる春もけふに暮行」（41ウ）

羈中の衣がへといふこゝろを。

55　幾さとの華の香とめし衣手は
　　かへうし旅をかごとにやせん

灌仏の日、深川の浄心寺に、甲州身延山の祖師の尊像御戸ひらきありてまうでぬ。殊さら今日は、参詣の貴賤道もさりあへずかまびすし。我たうとみ侍る宗祖なれば、とりわき念誦し侍りて、

56　くむからに濁る心もすみぬらん
　　法のめぐみの深川の水

君家へ行通ふいとまの日は、あてなる御館へ俳諧の御会に召れ、あるは爰かしこ遊観せしかば、いつしか卯月も半過ける。公事の有増も勤終れば、一日ふつかの」（42ウ）中には古郷へ帰らんとて、彼是取まかなひ侍りける。わりなくいひかたらひける人〴〵にしか〴〵のよしをつげて、

57　今更の別れおもへばはかなさよ
　　ちぎりしほども夏の夜の夢

かなたこなたへねもころにいとまごひして、卯月中の八日、東都を旅立とて、

58　かへるさのうれしきとしもおもほへず
　　ことよき人のけふの名残に

むつましくせし誰かれ五六輩、品川まで送り来りて、馬の口をとりて余波をおしみ、よしあるやどりに円居して、酒さかなとり出でくみかはし、又いつかあはんなどいひて、」（43ウ）

59　諸ともにしたふ言葉もはてぞなき
　　けふわかれ行武蔵野の原

とかくして時うつり、はや日もかたぶきければ、いつまでかくてありなん。まめやかに故郷に着て、とく便りせん。こゝにもまつなどたがひに心をのこし、立わかれて其日はやう〳〵金川の駅に行暮ぬ。十九日。かな川を朝とく立て、藤沢の遊行上人の御寺に詣でぬ。いか

なる日にてやありけん、参詣の老若おびたゞ敷、今少はやく来り給はゞ、とうとき事さづかり給ひなんといふ。

60　藤沢の法のひかりにむらさきの
　くもらぬそらをかけてたのまん」（44ウ）

小田原に着て旅舎に入侍りぬ。

廿日。あか星の光りとともに小田原を立て、箱根山に登りぬ。過し頃は雪つもりて山路のらうがはしかりしもいつしか光陰うつりかはり、道の芝草青みわたり、若葉の梢いと涼し。峠に休らひ湖水を見渡して、

61　筥根やま明はなれ行みづうみの
　なみぞまばゆき朝日さす空

夫より三嶋の明神にもうでぬ。折からかたはらに卯の花咲るを見て、

62　あかずとや神も三嶋のみづがきに
　しらゆふかけてさける卯の花

原の駅に日高く泊りぬ。友なふ人の」（45ウ）障子のこりなく押やりければ、富士の高ね軒端にさしむかひ、白妙の光りくま〴〵までも見えて、あくとしもなく打ながめ、誠に此松蔭禅刹にたっとき大とこおはしければ、行てしめしのこと聴聞し侍りぬ。故郷にてしたしき浄侶、とし久敷爰に勤め居給ふにあふて、やどりにともなひかへり、先たがひの無事をとひ、何くれとなくこしかたの積りしことぐさに、かりねの枕をもわすれ、たのみなき夏の夜のいたく更て、廿日の月いと面白くさしかゝり寄峯の眺望、弥増に類ひなし。

63　わすれめや夏の夜としも白雪に」（46ウ）
　まちえし富士の山の端の月

とよめるも心のうちなれば、たれかはしらん僧も、今はかえりなん人々のつかれをもおもはず有つる事よ。近きうちに故郷へかえりなん。そこ爰へよく〴〵伝へ給へなどいひて出たまへばふしぬ。

廿一日。短よのならはし、夢結ぶとしもなくゆり起されて空のけしきをうかゞへば、明がたちかし。

64　夏の夜はうはの空にや明ぬらん
　ふじの高ねに月をのこして

しらみ行横雲と共に立出ける。ちかき頃、こま人の中天積雪夏猶寒といひしは、むべもものせしかなとかえり見」（47ウ）せられぬ。従者のおのこどものきのふのやまぢにつかれけるとつぶやきければ、けふもはやく宿りなんとて、さつた峠を越て沖津にてとまりける。

廿二日。沖津を立て岡部に至る頃、そら曇り日もはや暮て嶋田に着ぬ。夜のうち雨降ば、水の程もおぼつかなければ、降出ぬさきに川を越んと心いられして、渡りぬるに蛍の多くすだくをみて、

65　行水のそこのこゝろの見ゆるまで
　てらせ川瀬にもゆるほたるは

金谷に宿りけるに程もなく雨はげしく降来りぬ。かしこうもはからひけるよと、まくらを高うしてふしぬ。」（48ウ）

廿三日。雨猶ふりけるに小夜の中山を過るとて郭公の啼を聞て、

66　ほととぎすねてかたらはゞ行やらで
　枕むすばん小夜のなかやま

浜松の旅亭に入て明し侍りける。

廿四日。朝とく立出、今切の海をわたりて、夫より御油、赤坂を打過、

山中の里にてかの隠士を尋ね寄けるに柴の扉とざせり。又あらざりけりといとほひなくて、壁に書付ける。

67　尋ねきて逢ぬ思ひに玉くしげ
　　ふたゝびまよふやまなかの里

かたはらのわら屋に入て、ことのよしをとひけるに、此程はらからなる岡崎の尼の」（49ウ）庵室へおはしけり。過し頃、尋ね給ひしにおはせざりしをくやみ給ひぬとくれ〴〵聞えて、道より弐丁余りひだりの方とかや、とひ寄給へとをしへける。さあらばあすなんたづねまからんと立出て、其夜は藤河の宿りに泊りぬ。

廿五日。岡崎の杉戸といへる所にてきのふの庵を尋ね寄ければ、隠士はしり出て、あな珍らしや、よくこそとて尼達も立出て、心のかぎりとりまかなひもてなしたまひ、和哥のうらはのうらもなく、難波江のよしあしとなき物がたりに時をうつしぬ。とゞまるべきにもあらねば、尼達にもいとまこひて立出けるに、隠士は名」（50ウ）残をおしみ矢矧の里まで送り来給ひ、猶茶舎に休らひ、爰にても久しく物がたりして、今はと立出る折から隠士袖をひかへて、

68　梓弓やはぎの里にひきとめん
　　みち行ぶりのわかれならずば

返し、

69　いそぐてふ旅路ならずばあずさ弓
　　矢はぎのさとをいかでわかれん

此秋は美濃へも尋ねんと有ければ、たがふる事なく来り給へと契りて、わかれ侍りける。夫より名にしおふ八はしを見侍るに、折から沢辺に杜若のをくれて咲出ける。物語の昔も思ひ出て、」（51ウ）

70　夏かけて咲八はしのかきつばた
　　ふりにし春のゆかりともみめ

北のかたとおぼしくて、遙なる空に高き峯の見えけるを、まぐさかるあげまきにいづこの山ぞととへば、木曽の御嶽とこたへける。さては浅間のたけに昔は煙の多くたちて、此処よりも見えたりけん。さてこそ信濃なる浅間のたけにとやよみ給ひぬらんと覚へ侍りける。

71　今も猶みやはとがめぬひさかたの
　　くもまに高き遠の山のは

夫より名古屋にたどり着て日は暮ぬ。

廿六日。従者ひとりを古郷にかへして、かくと告しめて先しるべのかたへ尋ねとひ、旅」（52ウ）の具とりおさめなどして、けふは此府にとゞまり侍りける。往かへり久しき旅のやどりも今宵ばかりになりて、翌はとく古郷にかへりなんとうれしくもふしながら、

72　是もまたなごりと思へ草まくら
　　こよひ露けき袖のかたしき

廿七日。犬山に至る頃、迎の者来りぬれば、打つれて古郷へ帰りけらし。いつしか七十日余りの旅の空、恙なくしてをのがじゝ家につきぬる事をよろこびあへりける。心静まりて道のすさびにかいつけける反古どもを取出て見侍るに、何かはよろしからん、其所からのうるはしきめうつしに、われぼめの言の葉の数さへしげきもうるさく」（53ウ）て、やり捨なんと思ひしを、又思ひかへして、よしや人にみすべきにもあらじ、唯道行末のねざめがちにて、むかし恋しき灯のもとにうち

ひろげて、忘れぬ風景を友とし侍らんとて、しは(ママ)のしたいして清き紙にうつしぬれば、虫のやどりともなさばなしてよ。ときは宝暦みつの年癸酉のさみだれのつれ〴〵も此事にかゝづらひて暮し侍りぬ。

東濃加治田邑

欣松斎

平井冬秀述